

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第41集

小鹿杉本堀合坪遺跡IV

静 岡 市

平成24年度 静岡県立大学新看護学部棟建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

静岡県埋蔵文化財センター

序

小鹿杉本堀合坪遺跡は、静岡平野の南東部、周辺には国の特別史跡である登呂遺跡、弥生時代の遺跡として著名な有東遺跡、古代東海道が発見された曲金北遺跡など、弥生時代から古代の遺跡が多く所在する考古学的にも重要な地域に位置する遺跡です。

このたび、静岡県立大学が看護学部の拡充のため、小鹿杉本堀合坪遺跡の所在する小鹿キャンパスに新看護学部棟を建設することとなり、それに先立ち、平成24年度に発掘調査を実施しました。

小鹿杉本堀合坪遺跡は、静岡県立大学小鹿キャンパスの建設に伴う平成4年度の静岡県教育委員会による試掘確認調査により、その存在が確認された遺跡です。これまで平成5年度に静岡県教育委員会文化課により、平成6・7年度には財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所による発掘調査が実施され、古代条里制に基づく大畦畔等の遺構や遺物の発見など多くの成果がもたらされています。また、平成13・15年度には、大学に隣接する県営富士白团地の建設に伴う調査が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所により実施され、弥生～古墳時代の集落跡が確認されています。

今回の調査地点では、古代条里制に伴う明確な大畦畔等は確認されませんでしたが、溝状遺構と土坑の時代的な前後関係が明らかになった点、遺構の密度の変化により遺跡の範囲を想定するためのデータが得られた点等の成果を上げることができました。また、平成13・15年度の調査で確認された弥生時代から古墳時代の包含層に相当すると考えられる層が、今回の調査地点でも確認されたことも、本遺跡の実態解明の一助となるものと考えております。

本書が研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県公立大学法人ほか、各関係機関の御援助と御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2014年2月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田順也

例　　言

- 1 本書は、静岡県静岡市駿河区小鹿2丁目2-1に所在する小鹿杉本堀合坪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 平成24年度の現地調査、整理作業は、平成24年度静岡県立大学新看護学部棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、平成25年度の整理作業は、平成25年度静岡県立大学新看護学部棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県公立大学法人の委託を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 小鹿杉本堀合坪遺跡の本調査、及び資料整理の期間は以下のとおりである。
本調査 平成24年7月～25年2月　調査対象面積2,110m² 実掘面積1,473.42m²
資料整理 平成25年2～9月
- 4 調査体制は以下のとおりである。
平成24年度
所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 前田雅人 総務係長 龍みやこ
主幹兼調査第一係長 富樫孝志 主任 木崎道昭
平成25年度
所長 勝田順也 次長兼総務課長 南谷高久 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 前田雅人 主幹兼総務係長 大坪淳子
主幹兼調査第一係長 及川司 主任 木崎道昭
- 5 本書の執筆は木崎道昭、鈴木三男、小林和貴が行った。分担は以下のとおりである。
第1章～第5章 木崎道昭
付編 鈴木三男 小林和貴
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 作業の効率化を図るために、業務の一部を以下の会社に委託した。
平成24年度　掘削業務委託 国際文化財株式会社
測量業務委託 株式会社フジヤマ
整理作業業務委託 株式会社パソナ
平成25年度 整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ
- 8 出土木製品の樹種同定は、東北大陸と受託研究契約を締結し実施した。
- 9 発掘調査と整理作業では、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
足立順司 河合修 菊池吉修（五十音順・敬称略）。
- 10 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、下記の国土座標を基準に設定した。
(X = -113,820.000, Y = -7,650.000) = (A, 0)
- 3 遺構図、遺物実測図の縮尺は、図ごとに適当な縮尺を用い、それぞれにスケールを付した。
- 4 出土遺物は3桁の通し番号(=遺物番号)を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版「標準土色帳」(農林水産省技術会議事務局監修1992)を使用した。
- 6 土層名は、第3章第2節の基本土層柱状図(第6図)に表示した名称を用いる。ただし、過去の調査の土層名は、各報告書に従った。
- 7 第2章第2節の周辺遺跡分布図(第4図)は、国土地理院発行1:25,000地形図「静岡東部」を複写し、加工・加筆した。
- 8 遺物の写真図版(図版8~12)の個々の遺物につけた番号は、遺物実測図(第19~24図)の番号と一致する。すなわち、16-2とあれば第16図の2ということを意味する。また、写真図版にのみ掲載した遺物については、①、②という表記にした。
- 9 付編の表・図版番号については、本書の他の表・図版とは別個に付け、独立した番号にした。
- 10 遺構記号については、以下のように表記した。
溝状遺構：SD、土坑：SF、畦畔状遺構：略記せず
遺構番号については、400番台から開始した。
- 11 本文や引用・参考文献の記載にあたっては、以下のように略した箇所がある
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
(各)県教育委員会→(各)県教委。ただし静岡県教育委員会を、「県教委」とのみ表記した箇所がある。
(各)市・町教育委員会→(各)市・町教委
- 12 遺構図等に入れた遺物の出土点については以下のとおりである。

◆ 木製品（燃えさし、箸、容器）	○ 土器
○ 木製品（用途不明品）	○ 陶磁器
● 杭	○ 自然遺物
■ 木柱	△ 金属

- 13 本製品の実測図に入れたスクリーントーンは以下のとおりである。



樹皮範囲



炭化範囲

目 次

第1章 調査に至る経緯

第1節 今回の調査に至る経緯	1
第2節 本遺跡の過去の調査について	2

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過	11
第2節 基本土層	13

第4章 調査の成果

第1節 遺構	16
第2節 遺物	33

第5章 まとめ

46

引用・参考文献

51

付編 静岡市小鹿杉本堀合坪遺跡出土木製品の樹種

53

写真図版

抄録

挿図目次

第1章

第1図 遺跡位置図	1	第7図 2区第1面全体図	17
第2図 調査地点位置図	3	第8図 2区第1面遺構図	18

第2章

第3図 静岡平野の地形分類図	6	第9図 第2面全体図	19・20
第4図 周辺遺跡分布図	8	第10図 第2面遺構図（第1ブロック）	22

第3章

第5図 グリッド配置図	11	第11図 第2面遺構図（第2ブロック）	23
第6図 基本土層柱状図	14	第12図 第2面遺構図（第3ブロック）	24

第4章

第13図 第2面遺構図（第4ブロック）	25
---------------------------	----

第14図 第2面遺構図（第5ブロック）	26
---------------------------	----

第15図 第2面遺構図（第6ブロック）	28
---------------------------	----

第16図 第2面遺構図（第7ブロック）	29
---------------------------	----

第17図	土坑実測図	32	第23図	遺物実測図（木製品3）	41
第18図	1区第3面全体図	33	第24図	遺物実測図（木製品4）	42
第19図	遺物実測図（土器・陶器）	34	第5章		
第20図	遺物実測図（金属製品）	37	第25図	小鹿杉本堀合坪遺跡周辺条里推定図	
第21図	遺物実測図（木製品1）	38			47・48
第22図	遺物実測図（木製品2）	40	第26図	溝状遺構及び畦畔状遺構方位図	49

挿表目次

第2章			第5表	遺物観察表（土器・陶器）	43
第1表	周辺遺跡一覧表	9	第6表	遺物観察表（金属製品：錢貨）	43
第4章			第7表	遺物観察表（金属製品：刃物類）	43
第2表	溝状遺構計測表	30	第8表	遺物観察表（金属製品：釘）	43
第3表	畦畔状遺構計測表	31	第9表	遺物観察表（金属製品：砲弾）	43
第4表	土坑計測表	31	第10表	遺物観察表（木製品）	44

図版目次

図版1	1 調査区全景及び1区第2面完掘状況 (北東より)	図版7	1 S D451完掘状況（南より） 2 S D454～456完掘状況（南東より） 3 S D457完掘状況（北東より） 4 1区第2面漆椀出土状況
2 調査区全景及び2区完掘状況 (南より)			
図版2	1 2区第1面完掘状況 2 1区第2面完掘状況	5 1区第3面木製品出土状況 6 1区第3面木製品出土状況	
図版3	1 2区第2面完掘状況 2 土層堆積状況（上層）	図版8	1 土師器・須恵器他（表面） 2 土師器・須恵器他（裏面）
図版4	1 土層堆積状況（中層） 2 土層堆積状況（下層）	3 灰釉陶器他（表面） 4 灰釉陶器他（裏面）	
図版5	1 1号畦畔状遺構及びSD441完掘状況 (南東より) 2 1号畦畔状遺構周辺の杭出土状況 (南東より) 3 2号畦畔状遺構完掘状況 (北東より)	5 中・近世陶磁器（表面） 6 中・近世陶磁器（裏面）	
図版6	1 S F401完掘状況（北東より） 2 S F402半裁状況（南東より） 3 S F403半裁状況（南東より） 4 S F404半裁状況（南東より） 5 S F406半裁状況（南東より）	図版9	1 転用硯？・墨書？ 2 古銭（洪武通宝） 3 鉄製品（刃物類・釘） 4 砲弾の薬莢
		図版10	5 砲弾の薬莢（側面） 6 薬莢雷管の刻印
		図版11	木製品1
		図版12	木製品2
			木製品3

第1章 調査に至る経緯

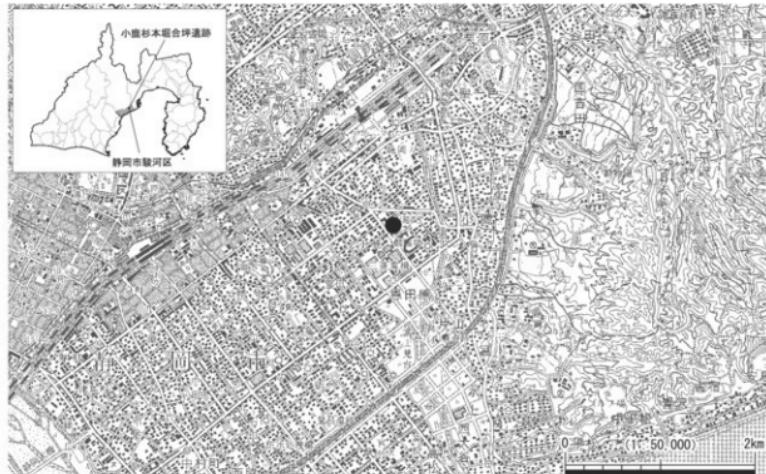
第1節 今回の調査に至る経緯

静岡県では、県民の健康保持のため、「静岡県総合計画」（平成18年策定）の部門別計画として、平成22年3月に「静岡県保健医療計画」を策定している。この医療計画では、第7章「医療人材の確保」の第4節で看護職員について触れており、そのポイントとして、「看護職員の計画的な養成と確保」が上げられている。

これを踏まえる形で、静岡県公立大学法人（以下大学法人と略）では、静岡県立大学（以下、県立大学と略）看護学部の拡充を計画した。平成26年4月を目指し、短期大学部看護学科との統合を行い、学生数を増員することになった。新看護学部開設に伴い、新看護学部棟が小鹿キャンパスに建設されることになったが、建設予定地全域が、周知の遺跡である小鹿杉本堀合坪遺跡の範囲内に位置していた。そのため、静岡県教育委員会文化課（現文化財保護課）では、建設予定地において、遺跡の有無等を確かめるため、平成21年9月26日に確認調査を行った（県教委 2011）。

確認調査では、2箇所のトレンチ（TR 1・2）と1箇所のテストピット（TP 1）を掘削した（調査面積は合計で約20m²）。地表下1.0m～1.3mまでは整地層であり、部分的に2.0mまで擾乱が及んでいた。TP 1 からは地表下1.3mで畦畔の可能性のある土層堆積状況が観察され、遺跡の存在が予測された。

このため、文化課と大学法人との間で協議が行われ、事前調査を行うことで合意された。平成22年11月には、文化財保護課から、調査経費の概算と調査期間について提示があり、本調査に向けて動きだした。途中、平成23年3月には建物の設計変更について大学法人からの通知があり、調査予定範囲等の変更があったが、24年3月16日付けで、発掘届が静岡市教育委員会に提出された。市教委では大学法人に



第1図 遺跡位置図

本発掘調査及び工事立合を受けるように指示した。これを受け、24年3月30日付けで大学法人は、静岡県教育委員会との間で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結した。これにより、大学法人は4月11日付けで静岡県埋蔵文化財センターに調査依頼を行った。大学法人と静岡県埋蔵文化財センターは、5月29日付けで発掘調査委託契約書を締結し、静岡県埋蔵文化財センターは正式に調査準備を開始した。

第2節 本遺跡の過去の調査について

本遺跡が、埋蔵文化財包蔵地として認識されたのは、非常に新しい。平成4年7～8月に行われた県教委文化課の一次調査により、遺跡として認識できるとされたのが最初である。調査地は県立静岡薬科大学（以下薬科大学と略）跡地であり、現在の県立大学小鹿キャンパスで、仮称県立医療福祉短大建設計画（当時）に先立って行われた調査である。ただし、この時の調査のみでは、遺跡の明確な内容・性格が不明であるとされ、平成5年7～9月にかけて、文化課により二次調査が行われた。これが本遺跡における最初の本格調査であった。

平成5年度の調査は、旧グランド部分を除く跡地の東西に、広めにA区とB区を設定し、旧グランド部分にそれより小さい面積の1～3区を設定して調査を行った。（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所により復原が行われていた、埋没条里畦畔の存在が推定できる箇所を選び、調査区を設定した。また、下層の調査も主目的の一つであった。

調査の成果として、上層で畦畔が検出され、それが、推定畦畔ラインと一致したとされる。また、下層では、6・1層（概報の呼称。以下概報の層位名を用いる）の砂層より木製品が、黒色泥炭層（7層）下面より、不定形の落ち込みが発見されている。さらに、9層の黒褐色土層において、木製品等で構成されるシガラ状遺構と、埋設杭が発見されている。

遺物は平安時代の陶器のほかに、木製品（箸、杭、建築材、用途不明の棒状木製品等）が検出されている。また、プラントオパール分析の結果によれば、2層の黄褐色粘質土層中からは大量に、7層の黒色泥炭層からはやや多く、イネ科植物のプラントオパールが検出されている。そこで報告者は水田の存在を想定している。報告者によれば、上層の畦畔を中世の、下層の遺構・遺物を平安時代のものと想定する（県教委 1994）。

この平成4～5年度の調査の報告は概報のみであり、詳細を欠く点もある。上層の畦畔についてはいさか不明瞭であり、下層の遺構・遺物の年代も、後述するように訂正を要するであろう。なお、この時の調査では、本遺跡は「曲金東遺跡」と命名されている。

平成6年になると、薬科大跡地は、県立大学短期大学部の小鹿キャンパスとして、平成9年度に開校されることになった。そこで、新校舎の建設が具体化することになり、その建設に先立って平成6～7年度に（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所により本調査が行われた（静文研 1996b）。調査区は校舎の建築箇所に1～3区を設定し、畦畔の確認を主目的としてNo.1～12のトレンチを設定した（第2図）。

この時の調査は、灰色砂混じり粘土層である第2層（以下（静文研 1996b）の層位名称を用いる）の直上・直下を上層の遺構検出面とし（第1・2遺構面）、さらに下層の遺構・遺物を確認するために、部分的に9層の暗褐色土層上面の調査も行った（第3遺構面）。

上層遺構面は静岡薬科大学の建物基礎等の攪乱が著しかった。その第1面では水田遺構として、5条の畦畔が検出され、第2層を水田耕作土としている。このほか第1面では実体不明の溝状遺構が多く検出されている。畦畔・溝状遺構とともに、静清平野の条里地割の方角に概ね一致するか直交することが指摘された。

第2面では、井戸1基、土坑9基、溝状遺構141条、擬似畦畔2条、杭列3列が検出された。報告では

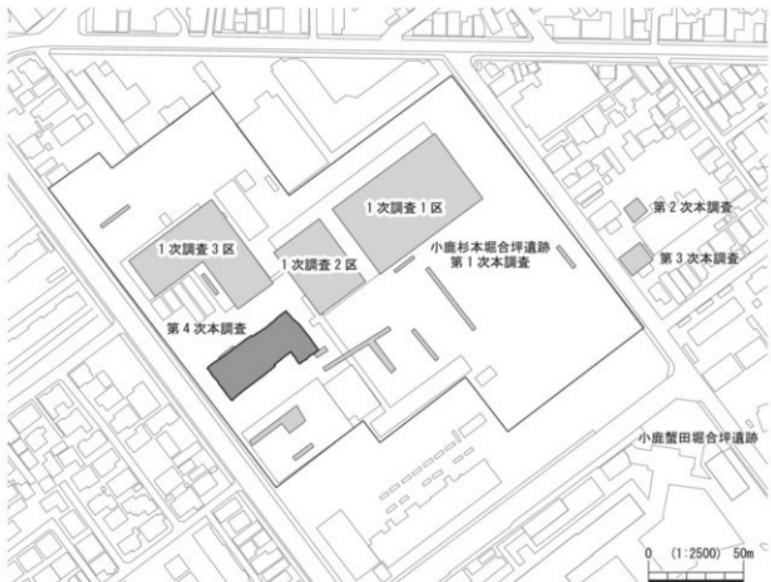
出土遺物等から、井戸は9世紀後半以降、土坑の一部を10世紀～11世紀前半に位置付けている。擬似畦畔のうち、1区で検出された擬似畦畔1を、推定条里界線と一致することから、条里的大畦畔としている。杭列はこの擬似畦畔1に伴うものである。

上層造構面、包含層の遺物としては、土器、陶器、木製品、石製品、金属製品が出土している。土器は土師器の壺、碗、甕が報告書に掲載されている。駿東型壺のほか、灰釉陶器模倣碗が検出されている。甕は甲型甕及び、いわゆる清郷型甕が出土している。陶器は、灰釉陶器、綠釉陶器手付瓶と山茶碗の小碗が検出された。灰釉陶器には皿、碗、長頸瓶があり、碗のうち2点には墨書が認められた。そのうちの1点は「万富」・「×富」と訛読された。灰釉陶器の年代は黒窯90号窯式期や折戸53号窯式期、百代寺窯式期とされた。9世紀後半～12世紀であろう。

上層造構面、包含層出土の木製品は、曲物、漆椀、鎌、楔、食事具（杓子形木器・箸・匙形木製品）、下駄、糸巻具、陽物、用途不明品（板状・棒状その他）、柱根、井戸材、杭が報告書で取り上げられている。石製品は全て砥石である。金属製品は煙管4点と鉛玉、包丁片である。煙管は明らかに近世以降のものであろう。

下層（第3面）の調査はごく部分的にしか行われなかつたが、1区の調査区からは旧河道が検出され、木片1点が出土した。

平成6～7年度の調査後、小鹿杉本堀合坪遺跡の調査対象地は、県立大学小鹿キャンパスの外に移つた。平成13年度（静文研 2002）と15年度（静文研 2004）に行われた県営富士白团地の建物建替えに伴う調査である。共に校地の北東側、市道をはさんだ箇所で、近接した調査地点である（第2図）。



第2図 調査地点位置図

両者ともに、上層遺構は検出できなかったが（註1）、下層において、調査面積と対比して大きな成果が得られた。両地点とも、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺物が、包含層である黒色泥炭層・粘土層中（註2）より多量に出土した（特に13年度調査地点）。遺構としては、13年度調査地点からは、堅穴状遺構が1基、小穴2基が、平成15年度調査区からは、畦畔「3」基（註3）、堅穴住居跡1基、方形周溝1基（註4）、焼土跡1基、ピット3基（註5）、自然流路1条が検出されている。

遺物としては、弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器が、調査面積と比較して多量に出土している。注目すべきものとして、以下のものがある。平成13年度調査では、二重口縁壺の口縁部片が出土している（静文研 2002 第14図49）。小片であるため全体の器形は不明だが、口縁下端部に円形の刺突文がめぐらしている。庄内式段階のものであろう（比田井 1995）。15年度調査の方形周溝遺構からは、高环が出土しているが、15年度調査の報告書第11図5は全体の器形の分かれる例で、渡井英善氏のII類、大麻式の後半段階に比定される（渡井 2008）。なお、両地点においてS字甕が1点も出土していないことも留意される。

木製品は、両地点で以下のものが出土している。建築材、柱根、礎板（ネズミ返しの転用品含む）、容器（方形槽？、円形ないし梢円形容器等）、布巻具、ヘラ状木製品、用途不明木製品（棒状及び板状）。石器としては、砥石、敲石、磨石、台石が出土している。

平成13・15年度の調査により、本遺跡の北東側に弥生～古墳時代の集落（墓域も？）があることが確認された。

以上、過去の調査について概観したが、本遺跡で今回の調査以前に既に判明していたことは以下のようなことであった。①遺跡は弥生～古墳時代の集落跡と、平安時代以降の水田遺跡が主体である。井戸や土坑の存在から平安時代以降には集落が存在した可能性もある。また、方形周溝墓の可能性のある遺構が検出されていることから、弥生～古墳時代の墓域が存在したかもしれない。②条里制地割と一致する大畦畔が検出されている。また、上層遺構で検出される溝等の大半は、条里制地割の方向と一致する。

今回の調査は以上のような過去の調査成果をふまえた上で行われた。

註

- (1) 平成13年度の調査地点では、平成6～7年度調査で遺構確認面を設定した灰色砂混じり粘土層（2層）ないしその相当層自体が残存していなかった（静文研 2002の第6図参照）。平成15年の調査地点では、その層順から考えて、③層の青灰色粘土層が相当すると思われる（静文研 2004の第5・6図参照）。ただし、この③層は残存状態が極めて悪く、ごく一部のみしか残っていないため、上層調査の対象とはしなかった。
- (2) 正確には13年度調査のⅩ層（黒色粘土）、IX-a層（暗茶色疊混粘土）、IX-b層（黒褐色疊混粘土）、15年度調査の⑦層（黒褐色粘質土）、⑧層（黒茶褐色土）、⑨層（暗褐色土）。
- (3) 1～3号畦畔のうち、2・3号は確実だとおもわれるが、1号は疑問が残る。なお、これらは何れも平安時代に想定できる層と、弥生～古墳時代の包含層の中間層で検出された。
- (4) 報告書では、周溝をもつ平地式建物跡の可能性を考慮し、敢えて周溝墓とは断定しなかった。ただし周溝墓として集成した研究もある（（篠原 2008）など）。
- (5) 15年度調査で検出された1～3号ピットのうち、2号ピットは確認面からの深度が浅く、柱根等も検出されず、小土坑の可能性がある。

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

小鹿杉本堀合坪遺跡は、静岡平野の東寄りに位置する。静岡平野は東西約6.3km、南北約7.4kmで、駿河最大級の河川である安倍川とその支流の蘿科川による、河川堆積物によって形成された扇状地がその大部分を占める。平野の南端は、浜堤が1列存在し、海岸に接続している。本遺跡の存在する安倍川左岸側に限れば、平野の東側は、更新統の砂礫層と有渡丘陵に画される。また、平野中には、古第三系中新統の堆積岩を主とした独立丘陵である、谷津山、八幡山、有東山が存在し、低地地形に少なからぬ影響を与えている（第3図）。

安倍川の扇状地は、賤機山丘陵南端部付近を扇頂とし、南～南東方面を主にして堆積物が広がっているが、前述の独立丘陵により張り出しが規制されて扇端となり、その東側は、大谷一池田一長沼低地となっている。この低地の東側には有渡丘陵があり、その麓は、丘陵の谷部から流失した砾を主とした堆積物により、小扇状地群を形成している。

安倍川扇状地の扇端部からは、手の指状の微高地が数本、南東方向に延びている。小鹿杉本堀合坪遺跡は、この微高地のうち、（仮称）曲金微高地の先端部分に立地する（加藤 1983）（松田 2006）。

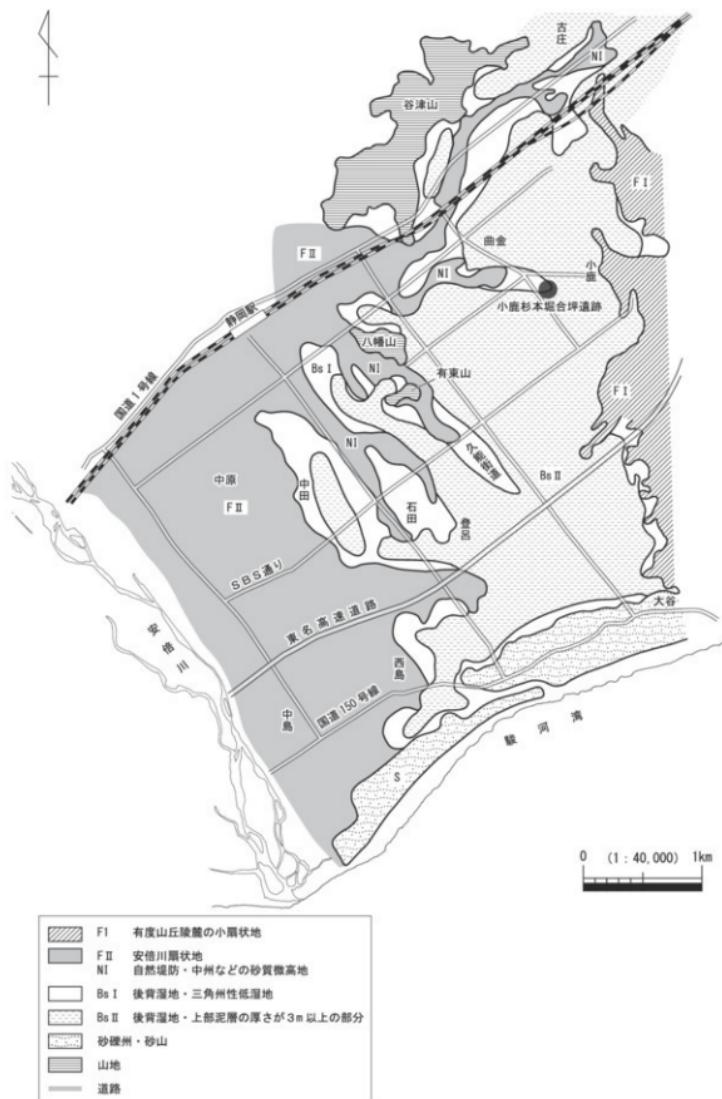
第2節 歴史的環境

小鹿杉本堀合坪遺跡周辺には旧石器時代から近世・近代に至る遺跡が存在し、重要遺跡も少なくない（第4図）が、本節では今回の調査に関連した時代（弥生時代以降）に限定して記述し、縄文時代以前については必要な遺跡についてのみ述べる。

本遺跡の存在する地域は、先述したように静岡平野の低地であり、その周辺の丘陵・山地部分も含めて、弥生時代以降の遺跡が多く分布する。まず遺跡の西側を中心とした周辺の低地遺跡について述べてゆく。

本遺跡の最も近隣には、南東に小鹿蟹田堀合坪遺跡（2）が存在する。灰釉陶器が発見され、平安時代以降の水田が想定されるなど、本遺跡と同様の内容の遺跡と考えられる（静文研 1995）。北西の近接地には、曲金A遺跡がある（3）。弥生後期後葉の型式として「曲金式土器」が設定された遺跡であるが、調査がほとんど行われておらず、実態は不明確である（静岡市教委 2012a）。その北西には、曲金B遺跡（4）が存在する。昭和57年に静岡市教育委員会による調査が行われ、古代瓦や井戸跡が検出された。遺跡内に所在する軍神社や、隣接していると思われる古代東海道、遺構・遺物等の在り方から、古代の有度郡衙か横太駅家関連施設と考える説がある（静岡県教委 2003）。その南には、豊田遺跡（6）がある。平成19年までに第7次までの調査が行われている。それによれば、弥生中期の方形周溝墓、後期頃の住居、弥生後期～古墳前期の水田跡や水田関連施設が検出されている（静岡市教委他 1982）（静岡市教委 2008）。なお、豊田遺跡の東側、本遺跡寄りには、三菱工場内遺跡（5）があり、古墳～古代の遺跡とされているが、調査は行われておらず実態は不明である。

豊田遺跡の南側には著名な有東遺跡（14）がある。登呂遺跡とともに、静岡平野を代表する弥生時代の遺跡とされてきた。中心となるのは、弥生中期～後期の集落跡と、方形周溝墓で代表される墓域である（静岡市教委 2011a）（静岡県埋蔵文化財センター 2012b）。県立駿河総合高校（旧市立商業高校）を中心とした地域では平成23年度までに22次の調査が行われたほか、遺跡の南側では、「有東梶子遺跡」



第3図 静岡平野の地形分類図（加藤（1983）による。一部改変）

名で、2次の調査が行われている。

この有東遺跡にはほとんど隣接する形で、南西～南側に鷹ノ道遺跡(20)と登呂遺跡(21)が存在する。両遺跡ともに弥生後期の集落跡と水田跡が検出されており、静岡平野における、弥生後期の代表的な存在である。

鷹ノ道遺跡は、弥生中期～後期の墓域、古墳後期～奈良時代の水田も検出されている。平成24年度までに14次の調査が行われている(静岡市教委 1996b)(静岡市教委 2010a)(静岡市 2013)。登呂遺跡は弥生時代の農耕社会の姿を、完全な形で初めて検出できた遺跡として、日本で最も著名な遺跡の一つであり、特別史跡に指定されている。戦後間もない頃の発掘調査が有名だが、近年、静岡市教育委員会によって遺跡再評価のための発掘調査が行われ、新しい成果がもたらされた(静岡市教委 2005・2006a)。

本遺跡の南側に目を転じると、汐入遺跡(24)、神明原・元宮川遺跡(29)がある。汐入遺跡は平成15年度までに6次の調査が行われた。弥生末～古墳前期初頭の集落が中心で、短期間で廃絶されたと想定される。円形周溝に囲まれた大形の独立桿持柱付建物跡が検出され、注目される。また、平安後期～鎌倉時代の道路遺構、溝状遺構、井戸、土坑が検出されており、小鹿杉木塙合坪遺跡と類似している。また、近世の土坑や、第2次大戦中の高射砲跡も調査された(静岡市教委 2004)。神明原・元宮川遺跡は、大谷川の両岸に広がる広大な面積を有する遺跡で、縄文時代～近代に至る各種の遺構・遺物が検出されている。中心となるのは、古墳時代～律令期の大量の祭祀遺物であり、「水辺のまつり」が行われた状況が復元できた(静岡県 1990)(静岡市教委 1990)。

本遺跡の北側には、JR東静岡駅とその周辺域に、曲金北遺跡(8)、長沼遺跡(57)がある。両遺跡は一体的なものであろう。共に東静岡駅周辺の開発により、多くの調査が行われている。曲金北遺跡は、平成22年度までに14次の調査が行われているが、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の第1次調査で検出された古代東海道が最も有名である(静文研 1996a)(静文研 1997)。これまでに、古代以降、古墳後期(2面)、古墳中期、弥生後期～古墳前期の水田面が確認されている。また、上層からは、平安時代～中世の土器・陶器等、近世の陶磁器等も出土している(静岡市教委 2010b)(静岡県埋蔵文化財センター 2012a)。長沼遺跡は平成23年度までに5次の調査が行われている。内容的には、曲金北遺跡とほぼ同様である(静岡市教委 2002)(静岡市教委 2012b)。

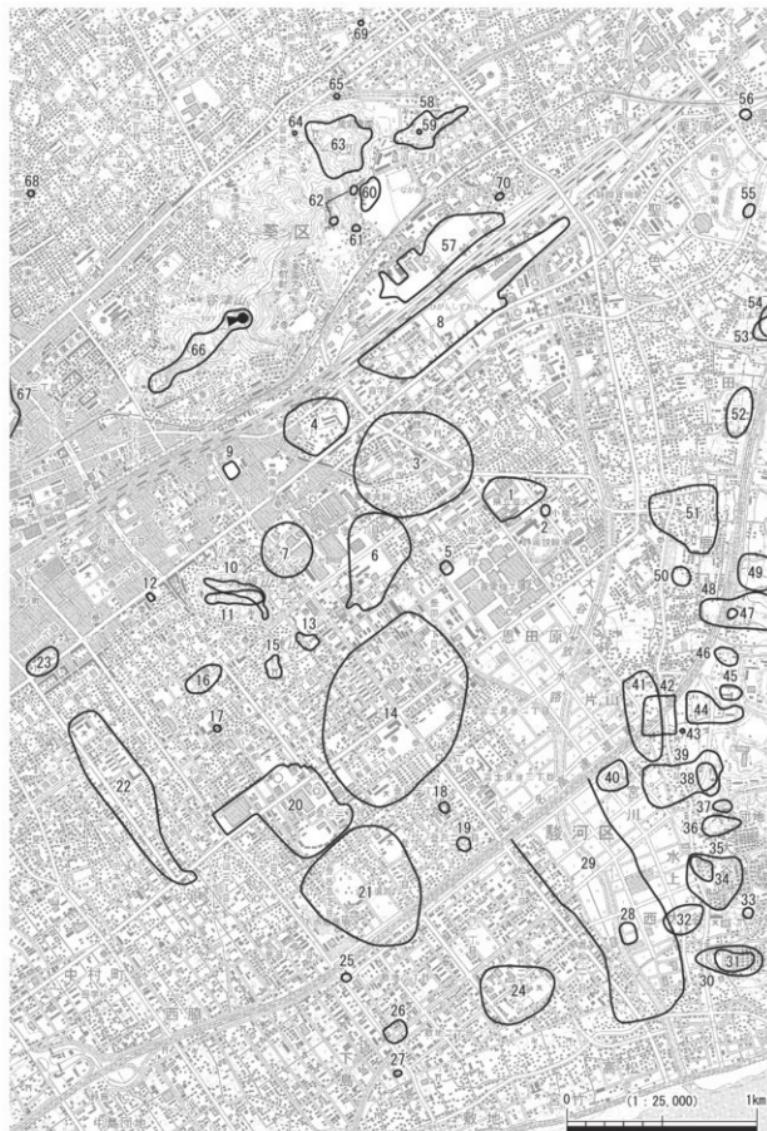
次に本遺跡の東側の、有渡丘陵西側斜面について述べる。

南側には宮川遺跡(39)、宮川古墳群(38)がある。宮川遺跡は平成20年度までに、5次の調査が行われており、縄文時代～近世にわたる複合遺跡であることが明らかになった(静岡市教委 2010c)。弥生後期～古墳前期の集落が中心であり、後述する片山庵寺の瓦窯(宮川瓦窯跡小段地区)も検出されている。また、近世の大形建物跡も発見された。宮川古墳群は古墳後期の群集墳だが、中期以前のものが含まれている可能性がある(静岡市教委 2011d)。

その北には、片山庵寺(42)、片山遺跡(41)がある。片山庵寺は、静岡平野において、第一の古代寺院であり、駿河国分寺に比定する説や地方豪族の氏寺とする説があり、決着はついていない。国史跡であるが、平成18年までに47次の調査が行われており、伽藍中心部から金堂、講堂、僧房が発見されている(静岡市教委 2000)(静岡市 2008)。近年行われた調査では、未発見だった塔跡の可能性の高い遺構が検出されている(静岡市教委 2009)。

片山庵寺の東北には、古墳後期の群集墳である小鹿古墳群(48)がある。第6号墳の小鹿山神古墳は出土品や施設の規模から、6世紀後半の有力首長層の墓と考えられている(静岡大学人文学部考古学研究室 2010)(静岡市教委 2011c)。

本遺跡の北東方向の丘陵斜面部には、池田山古墳群(53)、矢塚坪・門前坪遺跡(54)がある。池田山



第4図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	小鹿杉本堀合坪遺跡	36	清泉寺窯遺跡（清泉寺遺跡）
2	小鹿蟹田堀合坪遺跡	37	清泉寺窯瓦窯跡
3	曲金A遺跡	38	宮川古墳群
4	曲金B遺跡	39	宮川遺跡（小段遺跡、小段瓦窯遺跡、宮川公会堂横遺跡）
5	三菱工場内遺跡	40	異龍坪遺跡
6	豊田遺跡	41	片山遺跡
7	小黒遺跡	42	片山庵寺跡
8	曲金北遺跡	43	白山神社古墳（山神古墳）
9	前ヶ崎遺跡	44	静岡大学構内古墳群
10	八幡山城跡	45	大段II遺跡
11	八幡山古墳群	46	大段I遺跡
12	八幡三丁目遺跡	47	堀ノ内B遺跡
13	有明遺跡	48	小鹿古墳群
14	有東遺跡	49	堀ノ内A遺跡
15	有東砦跡	50	（遺物採集地点）
16	八幡五丁目遺跡	51	小鹿館推定地
17	女子高校遺跡	52	本覚寺裏遺跡
18	（遺物採集地点）	53	池田山古墳群
19	天神森遺跡	54	矢塚坪・門前坪遺跡
20	鷹ノ道遺跡	55	栗原遺跡
21	登呂遺跡	56	道下遺跡
22	ケイセイ遺跡	57	長沼遺跡
23	稲川遺跡	58	長沼古城跡（長沼砦）
24	汐入遺跡	59	茶臼山古墳
25	水洗遺跡	60	本郷坪遺跡
26	下島遺跡	61	仕舞海道坪遺跡
27	（遺物採集地点）	62	柚木瓦窯跡
28	大谷構井之坪居館跡	63	愛宕山城跡
29	神明原・元宮川遺跡	64	井上邸古墳
30	上ノ山遺跡（不動山下遺跡）	65	脅谷四丁目遺跡
31	上ノ山古墳群	66	谷津山古墳群
32	蛭田遺跡	67	駿府城内遺跡
33	（遺物採集地点）	68	（遺物採集地点）
34	井庄段古墳群（大正寺山遺跡、大谷小学 校遺跡）	69	千代田遺跡
35	井庄段遺跡（伊庄古墳）	70	棚田遺跡

古墳群は古墳時代後期の群集墳であるが、2号墳からは豊富な馬具が出土した（静岡県 1990）。

次に本遺跡と関連する遺跡について、本遺跡近隣以外のものも含めて述べる。本遺跡の東側方向にある小鹿館（51）は、遺跡地図・地名表未記載だが、「堀ノ内」の地名が残り、戦前の踏査記録でも「其北部に於て濠址又は高さ約二米の土壘の一部を見ることが出来る」とされている（沼館 1935）。室町～戦国時代の今川氏の有力家臣である、小鹿氏の居館推定地である（静岡県教委 1981）。

本遺跡の北西方向に、北東～南東に延びる谷津山があるが、山上ないしその周辺に弥生時代以降の遺跡が分布している。丘陵下にある本郷坪遺跡（60）では、律令期の畦畔（坪界線のものを含む）、中世及び近世の擬似畦畔と、近世以降の護岸列石付畦畔・溝状遺構・水路が検出された（静文研 2005）。純然たる水田遺跡であるが遺物は比較的多く、灰釉陶器、山茶碗、中世陶器、中世貿易磁器、かわらけ、近世陶磁器、中・近世錢貨、近世金属器等が出土しており、本遺跡に類似しているが、木製品は極めて少ない。谷津山の東斜面部には、柚木瓦窯跡群（62）がある。本郷坪遺跡で出土した古代瓦は、この遺跡から流れ込んだ可能性が高い。

本郷坪遺跡の北側の山上には、愛宕山城跡（63）がある。平成3年に静岡市教育委員会による本調査が行われ、造成された曲輪跡に、16世紀後半以前～17世紀前半の遺構（礎石を有する建物柱穴、直径約1～5mの土坑群等）、15世紀前半～17世紀前半の遺物が検出された。弥生後期～古墳前期と考えられる遺構も検出されている（静岡市教委 1993）。また、土壙、堀、堀切も残存するとされている（静岡市教委 2006b）。その東側には、長沼古城跡（長沼砦）（58）があったが、消滅している。ただし、造成前には曲輪、土壙、堀が確認できたとする所見もある（静岡古城研究会 2012）。

谷津山の西南部には、谷津山古墳群（66）がある。その盟主墳である谷津山1号墳（柚木山神古墳）は、全長約110ないし115m、後円部直径約70m、前方部最大幅約45mの、駿河國第一の前方後円墳である。主体部は明治時代に破壊されたと考えられ、木棺を有する板石積みの竪穴式石室と想定されている。副葬品として、神獣鏡6面、鉄剣、鉄鎌等があつたとされるが散逸し、銅鏡1点、石製品数点が残されているにすぎない。昭和62年度に静岡市教育委員会により、墳丘測量調査と確認調査が行われ、葺石を有する3段築成の古墳と考えられている。年代は4世紀中葉とされている（静岡県教委 2001）。周辺の古墳前期の人々を支配した在地首長の奥津城であろう。また隣接する2号墳も、小規模ながら前方後円墳と推定されている。

本遺跡の西側には独立丘陵の八幡山、有東山があるが、そこには、八幡山城跡（10）、有東砦跡（15）が存在する。種々の伝承を有する遺跡であり、曲輪、土壙、塁段等が存在するとされている（静岡市教委 2006b）。また、八幡山城跡と重なる形で、古墳後期の群集墳である八幡山古墳群がある（11）。八幡山の北東に、古墳時代前期を中心とする小黒遺跡（7）がある。昭和57年と平成6年に本調査が行われ、集落と水田跡が発見された。集落では、棟持柱を有する掘立柱建物3棟が、板塀？、区画溝、土塁状の盛土によって区切られた区画から検出された。また、有鉤銅鏡や銅製指輪、ミニチュア土器・土製品、木製琴等も発見されており、古墳時代初頭の静清平野における拠点集落の一つと考えられる（静岡市教委 1996a）（静岡市立登呂博物館 2004）。

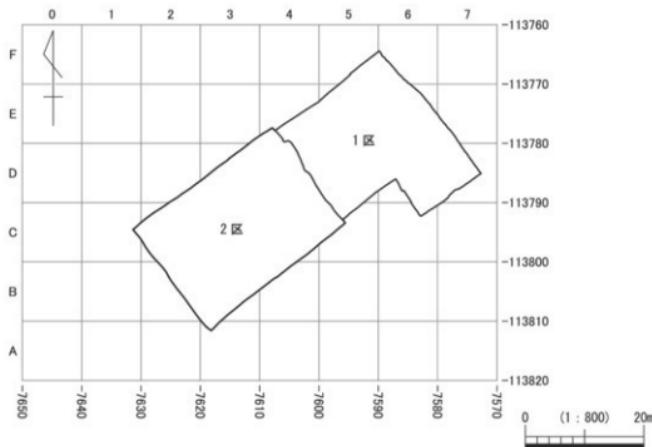
第3章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

1 調査の方法

排土処理の都合から、調査区を1区と2区に分け（第5図）、1区から先行して調査を開始した。1区の排土は盛土除去後の2区に置いた。1区の調査が終了した段階で2区の調査を開始し、調査の終了した1区を排土置場として使用した。

調査にあたっては、平面直角座標第VIII系を用いた国土座標、世界測地系の軸線を基準に、10m×10mのグリッドを設定した。グリッドには南から北へアルファベット、西から東へアラビア数字を付した（第5図）。



第5図 グリッド配置図

盛土と1層（第6図）を重機で掘削し、第1遺構面である2層上面で遺構確認と遺構掘削を行ったが、1区では第1面の遺構は検出されなかった。その後、遺物包含層である第2層を人力で掘削した。2層下面（3層上面）で遺構確認と遺構検出を行った。第2面掘削後、1区のみは、8層以下の第3面の調査をした。当初、平成13・15年度の遺構確認面である、黒褐色（または灰色）砂礫土層を検出するまで掘削する予定であったが、8層と、平成13年調査区のIX層、15年調査区の⑯・⑰層相当と考えられる泥炭層・白色粘土層が地表下6mまで続き、潤水と安全面の点から、それ以上の掘削が不可能となったので、砂礫（混じり）層の検出に至らなかった。2区は後述するように、第3面の調査を行わなかった。

遺物については、遺構から出土した遺物は遺構ごとに、包含層から出土した遺物はグリッド単位で取り上げた。ある程度の大きさを持つ遺物（腕時計の本体程度の大きさを目安とした）は、出土点を計測しながら取り上げた。遺構図面の作成は、空中撮影による写真測量を主にして実施した。遺構等の写真撮影は、中判カメラを主に使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。また、

35mmカメラとデジタルカメラを補助的に使用した。

(1)発掘調査

7月30日から重機による表土掘削を開始した。北東側の1区より開始し、順次2区側に移り、排土を場外搬出した。1区は、第1面である青灰色粘土層の上面近くまで極力重機で除去した。2区は以降の作業の便を考慮し、盛土部分の除去にとどめた。両地区とともに、静岡薬科大学時代の建物基礎と思われる搅乱部分が非常に多く、コンクリートガラ等が多量に排出された。8月9日に表土除去作業を完了し、夏休み明けの8月20日に1区の現場養生を行い、21日から作業員を投入して人力掘削を開始した。第1面の遺構検出を行ったが、遺構が発見されなかつたため、9月7日に掘上り写真を撮影し、1区第1面の調査を終了した。

9月7日から1区第2面の調査を開始した。2層の青灰色粘土層は遺物包含層であるので、人力で掘削を行い、3層の砂・シルト互層の上面（2層下面）を検出していった。また、重機で除去不能であつた搅乱土も、合わせて人力で除去した。10月3日で2層の人力掘削を終了し、以後第2面の遺構検出と調査を行った。10月30日に空掘と写測を行い、1区第2面の調査を終了した。

調査計画に従い、1区内に、第3面調査区を設定し、10月31日に中間層除去を行った。11月1日より、黒色泥炭層の人力掘削を開始した。板状及び棒状の木製品が出土し、遺物包含層が存在することが判明した。途中、大雨による調査区の水没等もあったが、11月13日に、前記した通りこれ以上の掘削は不可能と判断したため、人力掘削を終了し、1区全体の調査を終了した。14~15日に1区全体の埋め戻しを行った。

第3面に遺物包含層が存在することが明らかになつたため、その取り扱いをめぐって、県教育委員会文化財保護課との協議を行つた。検討した結果、建設予定建物による影響は極めて軽微であるため、今回の調査では、以後第3面の調査を行わないことになった。

11月16日からは、2区の盛土（8月の表土除去作業で、以後の作業での便宜のため残した部分）と1層の機械掘削を行い、第1面近くまで除去した。機械掘削の作業途上の11月20日から、人力による第1面の遺構検出作業を開始した。2区でも1区同様に、重機によっては除去できなかつた搅乱部分の除去作業を併行して人力により行つてゐる。12月5日から第1面での遺構調査を開始した。13日に空掘を行い、1区第1面の調査を完了した。

12月14日からは、遺物包含層である2層の青灰色粘土層の人力掘削を開始した。年末年始の休暇をはさみ、1月7日から掘削作業を再開し、10日に包含層の掘削作業を終了した。11日からは、第2面の遺構検出を行つた。15日からは遺構の調査を開始し、29日に2区第2面の空掘等を行い、2区の調査を完了し、引き続き埋め戻しを行つた。2月2日をもつて、今回的小鹿杉本堀合坪遺跡の現地調査を全て終了した。

12月より2月上旬まで、一部現地調査と併行しながら断続的に、基礎整理作業を現地プレハブ内で行い、遺物洗浄、写真整理、応急保存処理作業を行つた。2月6日に現地プレハブを撤去し、現地より完全に撤収した。

(2)資料調査

ア 平成24年度

平成25年2月から3月にかけて、埋蔵文化財センター本部にて本整理作業を実施した。整理作業年度が2ヶ年度にわたるため、24年度の調査は、遺物の注記、仕分け、接合、一部の遺物の実測、台帳作成等にとどめ、25年度の整理作業に備えた。

イ 平成25年度

4月から調査報告書作成のための資料調査を開始した。原稿執筆以外の整理作業の大半を委託し、5

月14日から整理・報告書作成作業を開始した。遺構図面は、現地測量業務委託の納品物である、写真測量のデータを原図として用いた。遺物については、木製品については写真撮影終了後に実測した。金属製品は保存処理作業終了後に実測を行った。遺構図・遺物図の編集、版組、トレースはAdobe Illustrator CS3により行った。

5月21日、6月26日、9月26日に遺物写真撮影を実施した。中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。

木製品は、8月23日に東北大名譽教授鈴木三男氏による樹種同定を行った。試料採取後、真空凍結乾燥法による保存処理を施した。

8月31日をもって、報告書作成にかかる作業を終了し、印刷・製本にかかる作業を開始した。

第2節 基本土層

今回報告する調査区は、平成6・7年度の調査地点（現短大校舎その他）に近接する箇所であり、土層堆積状況は類似している。そこで、平成6・7年度の土層呼称・番号を継続し、さらに、下層調査を中心とした平成13・15年度の土層呼称・番号も視野に入れて記述する。なお、今回の調査地点においては、2層である青灰色粘土層より下位の掘削を行った箇所が、1区の第3面調査区以外になく（擾乱部分は除く）、かつ2層までの層準は、調査区全体で共通しているため、第3面調査区北東壁を標準土層に定め、柱状図を表記し、他の土層図（調査区の周囲の壁面等）については省略する（第6図）（図版3～4）。

盛土：近代の水田面を整地するため、主に砂利・碎石を使用した盛土である。厚さ1mを超す箇所もあり、硬く締まっている部分が多い。後述するように、本遺跡は、太平洋戦争後半に設置された三菱重工業静岡発動機製作所の敷地内ないし近接地であったが、工場敷地は造成のために、有渡丘陵西麓の砂利を軽便鉄道を敷設して運び、地盤を造成したとされている（矢田 1994）。盛土の砂利にはこの時敷設されたものがあった可能性がある。

1層：灰色粘質土層。10Y4/1。粘性あり。非常に強く締まる。小石を少量含む。次の2層との境界はやや漸移的である。平成6・7年度調査の1層であり、平成15年度調査区の②層か。整地以前の表土層であり、水田耕作土と思われる。

2層：青灰色粘土層。5G4Y4/1。粘性・締まりともに強く、部分的には酸化鉄の集積が多い。上部に砂を若干含む部分がある。古代～近世の遺物包含層。平成6・7年度調査の2層であり、平成15年度調査区の③層であろう。今回の調査ではこの2層の上面を第1面、下面を第2面として、遺構検出・調査を行った。2層自体は遺物包含層のため、全て人力で掘削した。

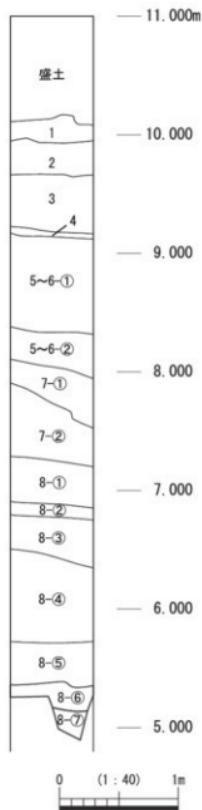
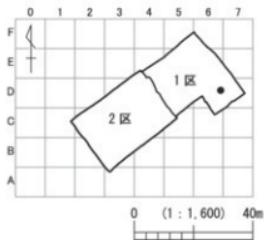
3層：砂・シルト互層。灰黒色砂が主体であるが、暗灰色のシルトが縞状に見られる。上部はシルトの含有が少なく。ほとんど砂層としてよい。平成6・7年度調査の3層であり、平成15年度調査区の④層であろう。

4層：暗灰色シルト層。N3/。層厚は薄い。平成6・7年度調査の4層であり、平成13年度調査区のI層であろう。

5～6-①層：シルトを僅かに含む灰黒色砂層。シルト層を部分的に、シルトに近い砂を互層状に含んでいる。

5～6-②層：灰黒色砂層。N3/。混入物をほとんど含まない、ほぼ純粹な砂層である。湧水が多い。7-①層：灰色粘土層。10G4Y4/1。粘性が強く、締まりややあり。自然木が含まれている。

7-②層：砂・シルト・礫・粘土の互層。砂が主体であるが、各種のものが混在する。ただし、次の8層の直上に、灰白色粘土層（上部）→礫の薄層（下部）という層準が、第3面調査区で



第6図 基本土層柱状図

は共通して認められた。この7-①・②層は、平成6・7年度調査の7層、平成13年度調査区のVI・VII層、平成15年度調査区の⑯・⑰層に相当するとと思われるが、7-②層に直接対応できる層は不明である。

以上、4層から8層の間に4枚の層を大別した。過去の調査の土層とは齟齬があり、正確な対応関係是不可能と思われる。ただし、今回の調査の4層と8層は、平成6・7年度の調査地点の4層と8層に正しく対応していると考えられるため（後述するように8層の下部は異なる可能性があるが）、ここでは、5～6層と一括してそれを①と②に分層し、7層も①・②層に分けた。ただし、7-①・②層は、平成6・7年度調査の7-aとb層、平成13年度調査区のVI層とVII層に、それぞれ対応しているのではない。

次の8層であるが、砾や砂が基本的に含まれないため、全体が平成6・7年度調査の8層、平成13年度調査区のVIII層、平成15年度調査区の⑭層に相当すると考えた。今回の調査地点ではそれを分層し、8-①～⑦層に分けた。

8-①層：黒色泥炭層。7.5Y R2/1。植物遺体の量は少ない。粘性は少なく締まりも弱い。掘削が容易な土である。第3面の木製品はこの層の最下部より出土した（下端は次の②層中に入るか）。

8-②層：黒色泥炭層。7.5Y R2/1。植物遺体の集中部。粘性は少ないが、①層より多い。締まりはややあり。植物遺体は横方向に多量に入り、層全体が植物遺体のため黄色がかったて見える。

8-③層：黒色泥炭層。7.5Y R2/1。植物遺体は少ない。粘性は比較的強い。締まりややあり。部分的に灰色粘土の間層がある。

8-④層：灰色粘土層。上部と下部でやや異なる。上部は10Y4/1、下部は10Y3/1で、下部の方がやや黒色味が強い。上部は20～30cmで、下部に比べて層厚が薄い。植物遺体は上部に比べて下部の方が少ない。二層に分けることは可能であるが、煩雑なため、一層にまとめた。

8-⑤層：黒色泥炭層。7.5Y R2/1。植物遺体はやや多いが、集中する部分が水平に縞状に観察され、植物遺体の含有の状況は一律ではない。粘性はやや強く、締まりはややある。微量であるが、灰色粘土のブロックを含んでいる。

8-⑥層：灰色粘土層。2.5G Y3/1。植物遺体は少量。粘性

は強い。締まりはあまり無い。

8-⑦層：黒色泥炭層。7.5Y R1.7/1。植物遺体を少量含む。粘性は強い。締まりはあまり無い。

このあたりの層まで掘削すると、調査区内は湧水が顕著になり、安全面から掘削を中止せざるを得なかった。ただし、掘削時の所見では、8-⑦層の下に砂層があることが確認された（注記や写真撮影は前記の事情でできなかった）。この砂層が過去の調査のどの層にあたるかは不明である。

以上、黒色泥炭層の上部の8-①層から、灰色粘土層の間層をはさんで、8-⑦層までを、平成6・7年度調査の8層と考えて記述した。過去の調査における土層の層準で、黒色泥炭層（平成6・7年度調査の8層、平成13年度調査区のⅧ層、平成15年度調査区のⅫ層）より下には、例外なく礫を含む褐色土層や砂礫層が存在していたことを根拠としている。今回の調査では、相当な深度まで掘削したのにもかかわらず、礫混じり層や砂礫層が検出されなかった。しかし、8-⑦層の下部に砂層が確認できたことや、各層の標高などの点より、土層の対応関係について、別の可能性をも考慮すべきだと考えるに至った。

別の可能性とは、今回の調査地点において、他の調査地点で確認された層が欠落し、平成6・7年度の調査で確認された下部の泥炭層及び粘土層（具体的には19~25層）が今回8層とした層の中に含まれていると考え得る可能性である。標高としては、報告書（静文研 1996）の土層柱状図No.2から判断する限り、19層の上部で約5.65m、25層の下部で約4.75mであり、今回の標準土層に対比すると8-⑤~⑦層の標高になり、概ね一致する。ただし、平成6・7年度調査の土層柱状図No.2において、8層上面の標高は約8.5mであるのに対して、同一層準と思われる今年度調査の8-①層上面の標高は、約7.3~7.2mであり、大きな齟齬があり、単純には比較できない。

結論として、今回の報告では8層に一括したが、その下部は平成6・7年度調査区の下部に存在した泥炭層及び粘土層の可能性も否定はできない、としておきたい。



表土除去作業



第1面造構検出作業



掘削土量の検査



土器接合作業

第4章 調査の成果

第1節 遺構

1 遺構の概観

今回の調査で検出された遺構は、第1面で、畦畔状遺構1条、溝状遺構（S D）2条である。第2面は、畦畔状遺構1条、土坑（S F）6基、溝状遺構55条である。第3面では遺構を発見することができなかった。

前述したように、検出面は、第1面は標準土層の2層の上面、第2面は下面である。第1・2面と第3面は中間層により時間差があることは明らかである。また、第1面と2面は2層をはさんでやはり時間差があると考えられる。そこで遺構については、各面ごとに述べていく。

2 第1面の遺構（第7～8図）（図版2・5）

2区から検出された遺構は、1号畦畔状遺構と、溝状遺構S D441・442のみである。S D441と442は、擾乱により切断されているが、主軸方向等より同一の溝であったと思われる。1区第1面では遺構は検出できなかった。既に述べているように、本遺跡の今年度の調査区は、旧薬科大時代の建物基礎と思われる擾乱部分が多く、そこに残存しない遺構があった可能性は否定できない。ただし、平成6・7年度調査区のように、特定箇所が全面的に擾乱を受けている状況ではなかった。よって、溝状遺構や畦畔（状遺構）のような長大な遺構は、存在しているとすれば、一部分でも検出される可能性が高いと思われる。にもかかわらず、ごく少数の遺構が、限定された箇所でしか検出されなかつた点は、今年度の調査区内においては、元来、第1面の遺構がほとんど存在していなかつた可能性を示唆するものである。

（1）1号畦畔状遺構（第8図）（図版5-1・2）

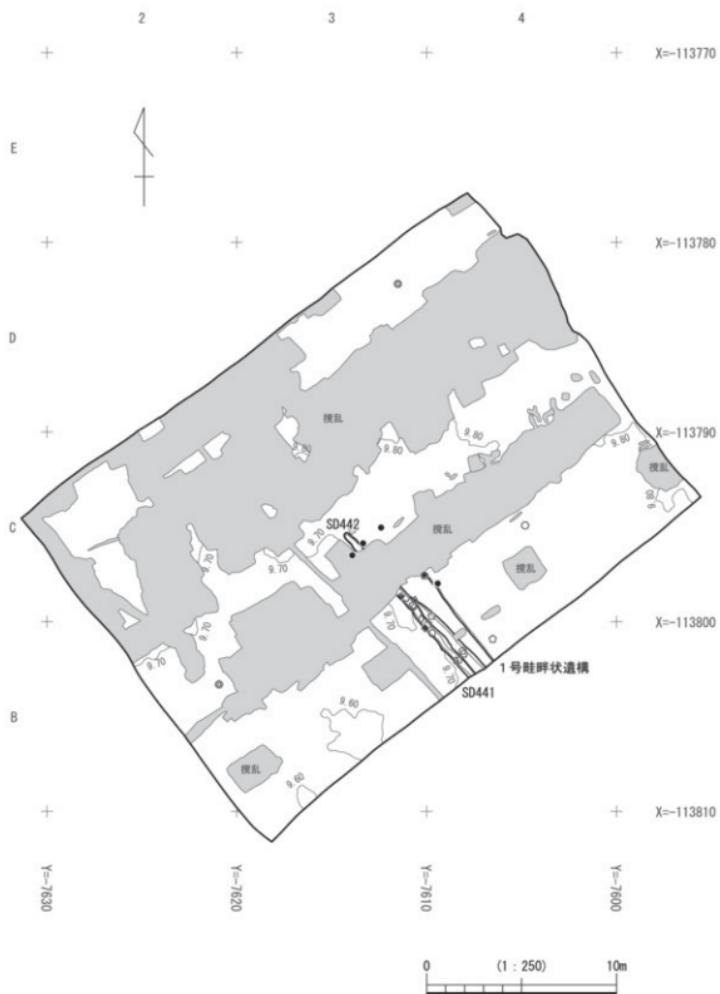
B-4、C-3、C-4グリッドから検出された。幅は上端で1.35～0.5m、下端幅は1.5～0.7m、高さは最大で14cmである。S D441と一体的なあり方と言える。断面形状は台形状を呈す。畦畔状遺構1とS D441・442に伴って、本来は杭列が存在したと思われるが、現状では杭の本数は少なく、杭列とは認識できなかった。

関連する遺物は上端や肩及び周辺から出土している。ただし、時代が判明するものはない。伴出すると思われる杭の中に、新しいと思われる釘（恐らくは近代以降）が刺さっているものがあった。（第2節参照）。

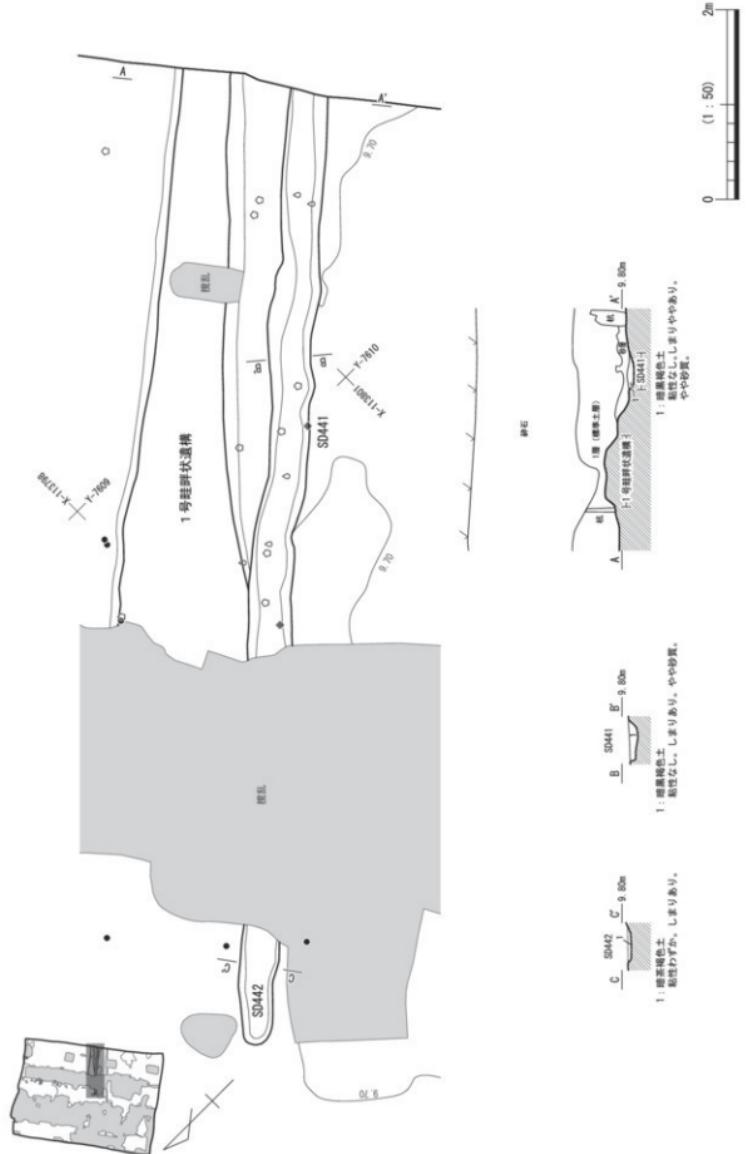
第5章の第25・26図を参照すれば、この1号畦畔状遺構と次のS D441・S D442は表層条里の坪界線の位置と概ね一致する。従って、この1号畦畔状遺構は坪界線を反映した畦畔である可能性は高く、S D441・S D442はそれと関連する溝であると想定される。

（2）S D441・S D442（第8図）（図版5-1）

B-3、B-4、C-3、C-4グリッドで検出された。前述した通り、同一の溝状遺構と見なすことができるので、一括して述べる。幅は上端で最大幅約0.5m、下端幅は最大幅約0.3m、最大深さは確認面より約10cmである。1号畦畔状遺構と一体的なあり方を示すが、北側で1号畦畔状遺構を切っている。底面は平坦であり、断面形状は多少の乱れはあるが逆台形状を呈す。覆土は1層であるが、覆土の上に砂の集積層が見られる部分があり、1号畦畔状遺構の肩に続いている。遺物であるが、溝の周辺を含めて、今回の調査で検出された溝状遺構中、最も多く出土している、木製品や木片がやや多く出土したほか、松傘などの自然遺物も出土した。ただし、土器・陶磁器は少なく、掲載不能の小片のみである。



第7図 2区第1面全体図



第8図 2区第1面造機図



第9図 第2面全体図

前述したように、1号畦畔状遺構と一体的と考えられ、条里の坪界線と関連がある可能性が高い。

3 第2面の遺構（第9～17図）（図版2・3・5～7）

遺構は1区・2区ともに検出されたが、分布状況には何点かの特徴を指摘できる。まず、1区に比べて2区は遺構の密度が低いことである。ただし、1区でも遺構の密度の低い箇所があるので、必ずしも明確ではない。第二点として、土坑の分布する範囲が限定されていると思われることである。土坑は1区のみで検出されている。從って今回の調査区全体では東側でのみ検出されているわけである。ただし、畦畔状遺構や溝状遺構と異なり、擾乱により破壊されてしまって検出できなかった可能性も多いので、実際には2区側にも存在した可能性も否定できない。しかし、平成6・7年度の調査でも、土坑は最も東側に位置する1区のみから検出されており（静文研 1996b）、本遺跡では、遺跡の西側（今回の調査の2区以西）には本来存在しなかったと考えたい（註1）。

（1）2号畦畔状遺構（第10図）（図版5-3）

D-6グリッドから検出された。最大幅は下端で約1.0m、上端で約0.7m、最大長は約3.7mで南西端はS D412に切られている。最大高約11cmである。ただし、東南側は非常に低くなり、上端と下端の高低差は極めて小さくなる。実測図は作成しなかったが、肩部分に砂の堆積が集中している箇所があった。直接遺構に伴う遺物はほとんどなく、かつ小片のために図示できなかった。この遺構の位置付けについては、第5章で述べたい。

（2）溝状遺構（SD）

1区から40条、2区から15条、計55条の溝状遺構が検出されている。この中には本来同一の溝で、擾乱その他（確認面からの掘り込みが浅く、途中で消失してしまうなど）により、別にカウントしたものも含まれている。条数が多いため、第1～第7ブロックに分け、各ブロックごとに述べていきたい。

ア 第1ブロック（第10図）

1区南部で、S D401～403、409～417、428～432の溝が検出された。溝状遺構が密に存在するブロックである。このうちS D415・416、431・432は擾乱で切られているが、同一の溝であろう。S D413と432、428と430も本来同一だった可能性が高い。北東～南西方向に主軸をもつ、S D409・429・432（恐らくは415・416も）は2号畦畔状遺構も含めて、主軸方向が類似し、規格性が高い。またこれらに交差する430（及び428）はほぼ直交する。

S D401～403もN65°E当たりを中心とし、主軸方向はほぼ揃っている。S D413・415・410はほぼその中間と見なせるであろう。結論付けるならば、このブロックにおいては、東側に行くほど、主軸方向は東南側に寄ると言えそうである。

次に現地で確認し得た、溝の切り合いの先後関係について述べる。S D410→411、S D430→431である。

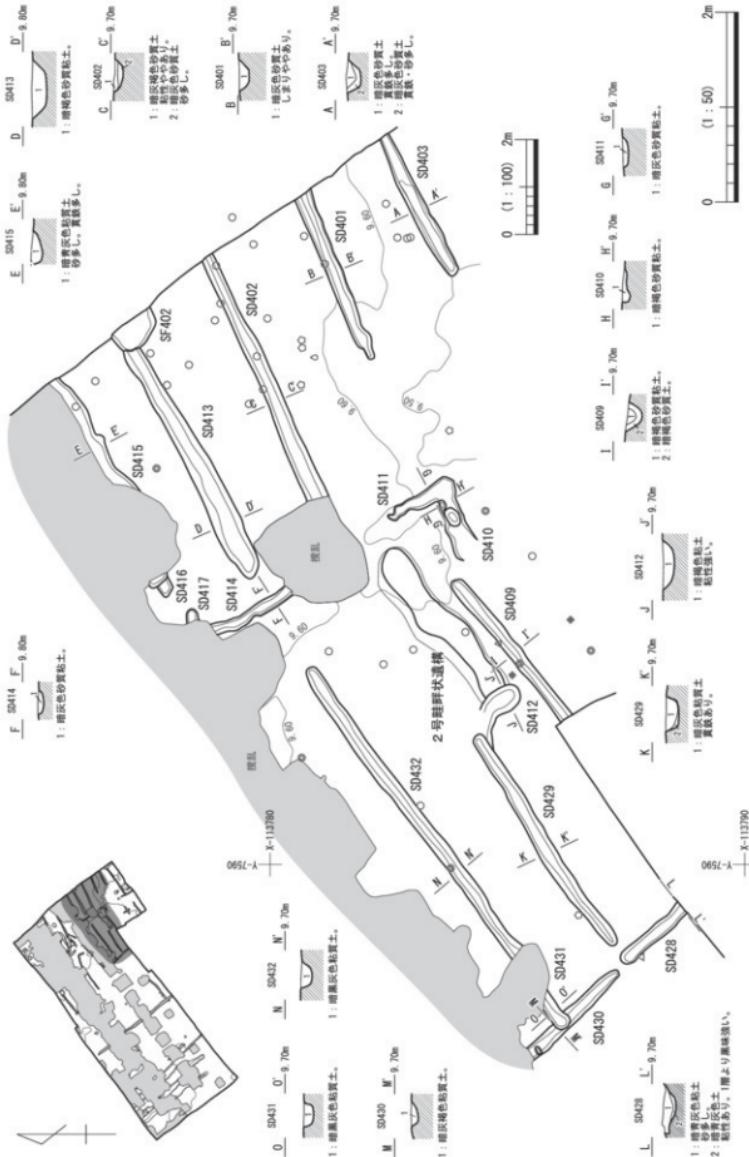
なお、S D401・402・409・415・432の溝中に遺物の出土点のマークがあるが、これらは上層の2層包含層より出土した遺物であり、遺構の覆土から出土したものではなく、遺構に伴う遺物ではない。

イ 第2ブロック（第11図）

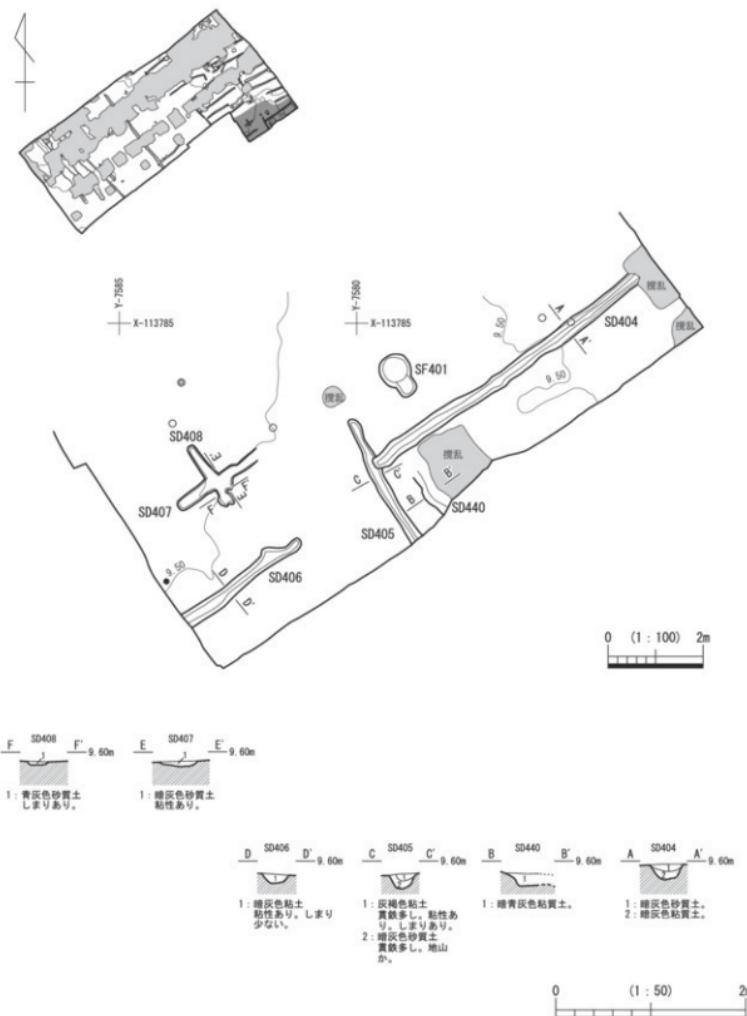
1区南東端部で、S D404～408、440の溝が検出された。北東～南西方向に主軸をもつS D404・406・407は、主軸方向がほぼ完全に一致し、規格性が高い。S D407に交差するS D408もS D407と直交し、同一グループと判断できる。これに対してS D405は若干主軸がずれている。S D440は擾乱のため不明である。

溝の切り合いの先後関係については、S D405→404、S D407→408が確認できた。

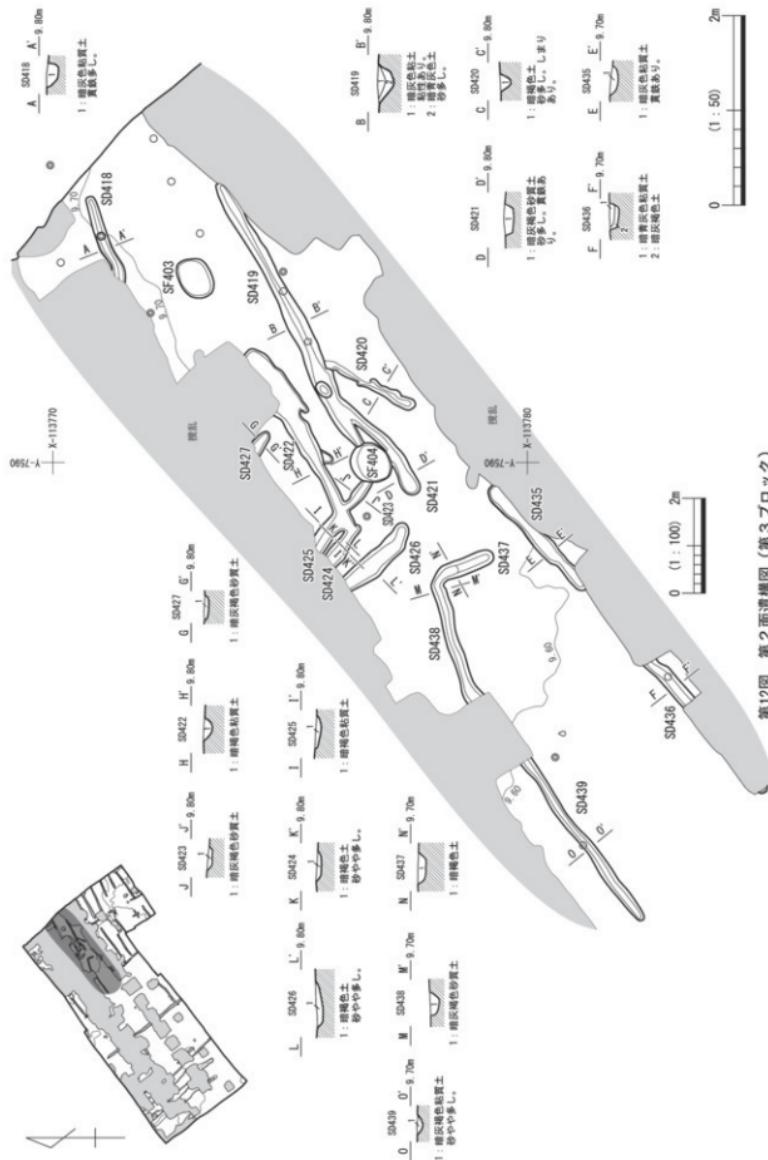
S D404の溝中に遺物の出土点のマークがあるが、第1ブロック同様に、遺構に伴う遺物ではない。



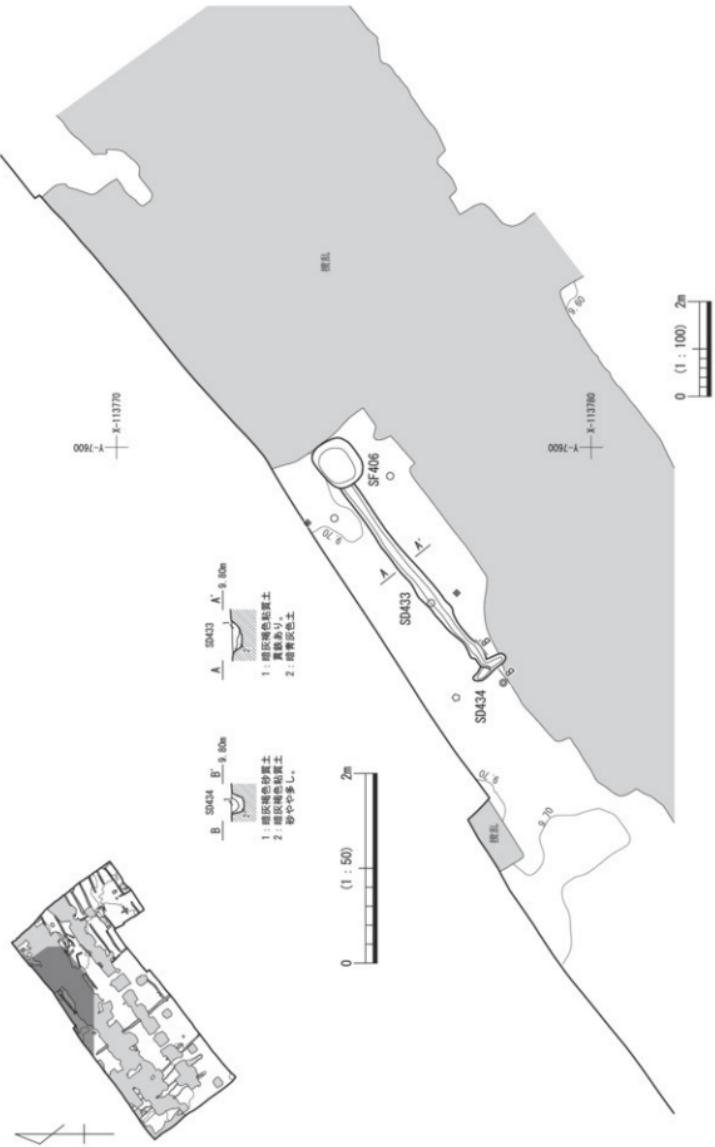
第10図 第2面構造図(第1ブロック)

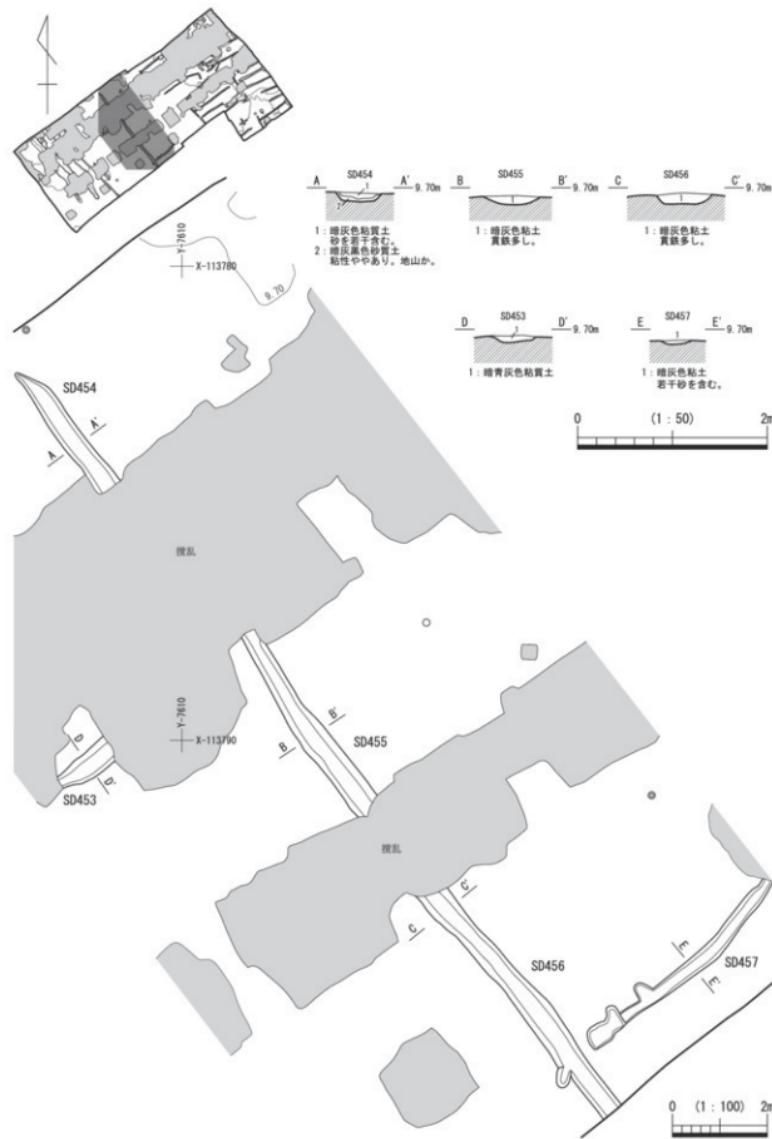


第11図 第2面遺構図（第2ブロック）



第12図 第2面透構図(第3ブロック)





第14図 第2面遺構図（第5ブロック）

ウ 第3ブロック（第12図）

1区北側で、S D418～427、435～439の溝が検出された。S D437より北東部分は今回の調査区で遺構の密度がもっとも高い部分である。

主軸方向で見ると、S D418・419・422・438が一つのまとまりをなし、S D435・436・439もまとまる。S D435・436は擾乱により切られているが、同一の溝であろう（主軸方向は異なるがS D438と439も同一であろう）。これらに交差する方向の溝では、S D437が前者と、S D423～427が後者とほぼ直交し、グルーピングできる。S D420のみが、主軸方向についてやや異質である。

溝の切りあいの先後関係については、S D420→419、S D437→438が確認できた。

S D419・439の溝中に遺物の出土点のマークがあるが、前述のとおり遺構に伴う遺物ではない。これに対してS D436の覆土より遺物が出土している。土師質土器の微細な破片で、掲載していない。

エ 第4ブロック（第13図）

1区西側で、S D433・434の溝が検出された。S D434より西南側は、1区端部～2区となり、遺構のほとんど検出されない箇所になる。

S D433の主軸は、N52°Eであり、南側第3ブロックのS D439（主軸はN54°E）とほとんど同一であり、擾乱部分を隔てて若干離れてはいるが、規格性を見て取れる。S D433と切り合う434はほぼ直角に交わり、やはり規格性を窺うことができる。

溝の切りあいの先後関係は確認できなかった。S D433の覆土から1点の遺物が出土している。土師質土器の破片で、环?の口縁であるが微細な破片であるため掲載していない。

オ 第5ブロック（第14図）(図版7-2・3)

2区東北部分で、S D453～457の溝が検出された。全体として遺構の密度は薄い。

S D454～456の主軸は、N39°E～N40°Eであり、ほとんど同一で、擾乱により切られているが、本来は一本の溝であったと考えられる。S D457と453は、S D454～456とほとんど直角に交わる主軸であり規格性を見て取れる。

このブロックの遺構からは遺物は出土していない。

カ 第6ブロック（第15図）

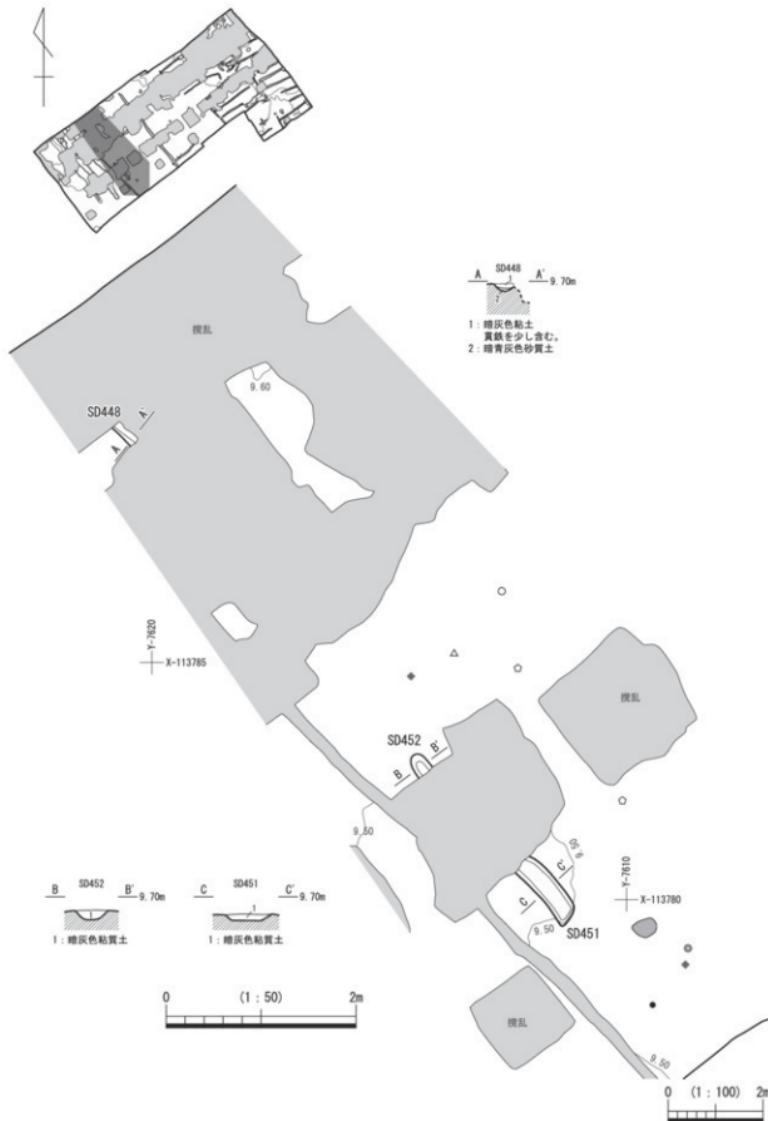
次の第7ブロックと位置が近く、作図の関係で分離したものである。S D451・452・448が検出された。S D451と452は擾乱により切られているが、本来は一本の溝であったと考えられる。主軸方向は第7ブロックの溝とほとんど一致し、規格性を見て取れる。なお、第5章の図27・28で示したとおり、表層条里の坪界線の推定位置は、本ブロックの溝状遺構の位置である。第2面においては、この位置では畦畔（状遺構）は検出されていないが、第1面ではほとんど同じ場所で、畦畔と思われる1号畦畔状遺構が検出されており、本ブロックの溝状遺構も坪界線を画する溝である可能性がある。

このブロックの遺構からは遺物は出土していない。

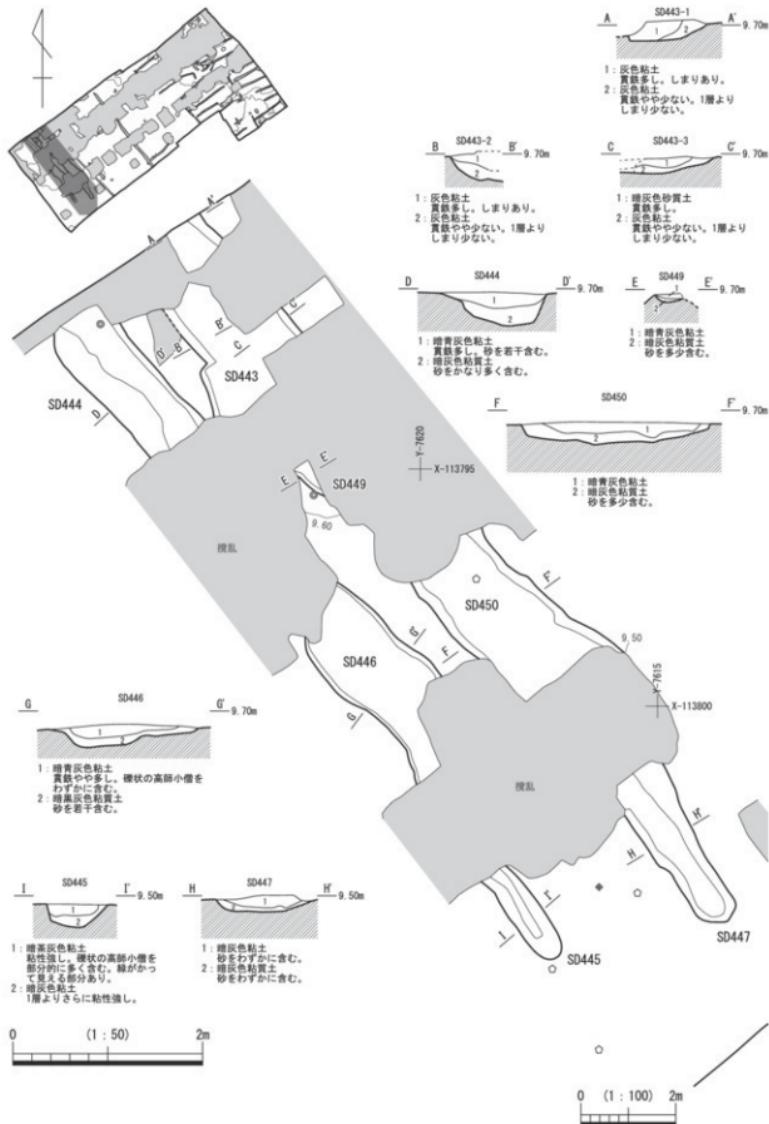
キ 第7ブロック（第16図）

今回の調査地点で最も西側に位置するブロックである。S D443～447、449・450が検出されている。擾乱により切られているが、S D444・445・446と、S D443・449・450・447はそれぞれ同一の溝であろう。

このブロックで検出されている溝は、第1～6ブロックで検出されている溝に比べて上端幅が広く、明らかに様相を異にする。何らかの区画溝ないし、水路であった可能性がある、坪界線と関連する溝であることも想定できる。このブロックの遺構からは遺物は出土していない。S D444・450の中に遺物点があるが、上層の包含層からの出土であり、遺構に伴うものではない。



第15図 第2面遺構図（第6ブロック）



第16図 第2面遺構図（第7ブロック）

第2表 溝状遺構計測表

遺構名	区	面	グリッド	長さ m	幅 m	深さ m	主軸方位	備考	挿図
S D 401	1	2	D-7	(3.76)	0.39	0.11	N67°E		第10図
S D 402	1	2	D-6,7 E-6,7	(5.51)	0.63	0.10	N62°E		第10図
S D 403	1	2	D-7	(3.29)	0.42	0.16	N64°E		第10図
S D 404	1	2	D-7	(0.69)	0.34	0.17	N54°E		第11図
S D 405	1	2	D-6,7	(2.93)	0.30	0.17	N29°W		第11図
S D 406	1	2	C,D-6	(2.96)	0.39	0.11	N55°E		第11図
S D 407	1	2	D-6	(2.05)	0.42	0.06	N55°E		第11図
S D 408	1	2	D-6	(1.53)	0.30	0.04	N35°W		第11図
S D 409	1	2	D-6	(3.75)	0.33	0.18	N51°E		第10図
S D 410	1	2	D-6	(1.26)	0.46	0.09	N65°E		第10図
S D 411	1	2	D-6	(1.57)	0.43	0.05	N31°W		第10図
S D 412	1	2	D-6	(1.24)	0.53	0.13	N56°W		第10図
S D 413	1	2	E-6,7	(5.51)	0.63	0.13	N62°E		第10図
S D 414	1	2	D,E-6	(1.86)	0.27	0.06	N28°W		第10図
S D 415	1	2	E-6	(3.00)	(0.36)	0.12	N59°E		第10図
S D 416	1	2	E-6	(0.44)	0.44	—	N59°E		第10図
S D 417	1	2	E-6	(0.27)	0.25	—	N87°E		第10図
S D 418	1	2	E-6	(1.96)	0.25	0.06	N70°E		第12図
S D 419	1	2	E-6	(6.29)	0.51	0.09	N62°E		第12図
S D 420	1	2	E-6	(2.11)	0.28	0.06	N25°E		第12図
S D 421	1	2	E-5,6	(2.32)	0.37	0.05	N47°E		第12図
S D 422	1	2	E-5,6	(4.53)	0.68	0.05	N60°E		第12図
S D 423	1	2	E-5	(0.84)	0.27	0.03	N51°W		第12図
S D 424	1	2	E-5	(0.97)	0.38	0.03	N52°W		第12図
S D 425	1	2	E-5	(0.71)	0.24	0.04	N50°W		第12図
S D 426	1	2	E-5	(1.77)	0.50	0.08	N51°W		第12図
S D 427	1	2	E-6	(0.48)	0.29	0.03	N54°E		第12図
S D 428	1	2	D-5	(1.71)	0.32	0.15	N42°W		第10図
S D 429	1	2	D-5,6	5.29	0.38	0.14	N56°E		第10図
S D 430	1	2	D-5	(2.53)	0.34	0.08	N43°W		第10図
S D 431	1	2	D-5	(0.88)	0.35	0.11	N55°E		第10図
S D 432	1	2	D-5,6	(7.45)	0.35	0.12	N54°E		第10図
S D 433	1	2	E-4	(4.94)	0.41	0.13	N52°E	土器1点出土	第13図
S D 434	1	2	E-4	0.83	0.27	0.09	N37°E		第13図
S D 435	1	2	D,E-5	2.95	0.38	0.05	N48°E		第12図
S D 436	1	2	D-5	(1.19)	0.33	0.05	N45°E	土器1点出土	第12図
S D 437	1	2	E-5	(1.39)	0.34	0.05	N24°W		第12図
S D 438	1	2	E-5	(2.59)	0.38	0.05	N72°E		第12図
S D 439	1	2	D,E-5	(4.17)	0.27	0.03	N54°E		第12図
S D 440	1	2	D-7	(1.07)	(0.37)	0.14	N37°W		第11図
S D 441	2	1	C-3,4 B-3,4	(5.96)	0.48	0.10	N41°W	用途不明木製品等出土	第8図
S D 442	2	1	C-3	(1.23)	0.41	0.04	N43°W		第8図
S D 443	2	2	C-2	(4.04)	2.34	0.29	N37°W		第16図
S D 444	2	2	C-2	(3.46)	1.47	0.36	N42°W		第16図
S D 445	2	2	B-3	(2.21)	0.70	0.25	N36°W		第16図
S D 446	2	2	B-2,3 C-2,3	(4.08)	1.71	0.25	N39°W		第16図
S D 447	2	2	B-3	(3.69)	1.21	0.18	N34°W		第16図
S D 448	2	2	C-2	(0.56)	(0.23)	(0.09)	N52°W		第15図
S D 449	2	2	C-2	(0.66)	(0.35)	(0.10)	N39°W		第16図
S D 450	2	2	C-2,3	(3.36)	2.11	0.24	N43°W		第16図
S D 451	2	2	B-3 C-2	(1.54)	0.51	0.07	N42°W		第15図
S D 452	2	2	C-3	(0.47)	0.37	0.11	N34°W		第15図
S D 453	2	2	C-3	(1.33)	0.56	0.08	N54°E		第14図
S D 454	2	2	D-3	(3.14)	0.49	0.11	N39°W		第14図
S D 455	2	2	C-4 D-4	(4.63)	0.63	0.10	N34°W		第14図
S D 456	2	2	C-4	(5.97)	0.65	0.12	N40°W		第14図
S D 457	2	2	C-4,5	(5.12)	0.32	0.05	N48°E		第14図

第3表 畦畔状造構計測表

造構名	区	面	グリッド	長さ m	幅 m	最大高さ m	主軸方位	挿図
1号畦畔状造構	2	1	B-4 C-3,4	(6.26)	(1.55)	0.14	N42°W	第8図
2号畦畔状造構	1	2	D-6	(3.82)	(0.49)	-	N52°E	第10図

(3) 土坑 (S F) (第17図) (図版6)

今回の調査では6基の土坑が検出されている。溝状造構との重複関係を持つ土坑は、全て溝状造構を切って構築されており、溝状造構より新しい時期の所産であることが確認できた。以下個別に記述するが、計測値については第4表の土坑計測表を参照。S F401を除き遺物の出土はない。

ア S F401 (図版6-1)

D-7グリッドより検出された。深い円形の土坑と浅い梢円形の土坑が重複した平面形である。断面の土層を見る限りでは、同時に掘られたか、梢円形の方が後で掘られたかである。覆土中より、土師質土器（环？の口縁部）の小片（掲載せず）が出土したが、埋没中に周囲から流れ込んだ可能性もあり、この土坑に伴うものか断定はできない。

イ S F402 (図版6-2)

E-7グリッドより検出された。S D413を切っている。東側は排水用に設けた溝により破壊してしまった。土層図のA'側は排水溝からの水の流入を防ぐため土手状に残したため未掘である（土層線の破線部分）。上端の平面形は不正な梢円形ないし円形である。壁は垂直に近く立ち上がる。遺物はない。

ウ S F403 (図版6-3)

E-6グリッドより検出された。溝との切り合いはない。上端の平面形は歪んだ隅丸長方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。遺物はない。

エ S F404 (図版6-4)

E-5・6グリッドより検出された。S D419・421・423を切っている。上端の平面形は歪んだ円形である。壁は垂直に近く立ち上がる。遺物はない。

オ S F405

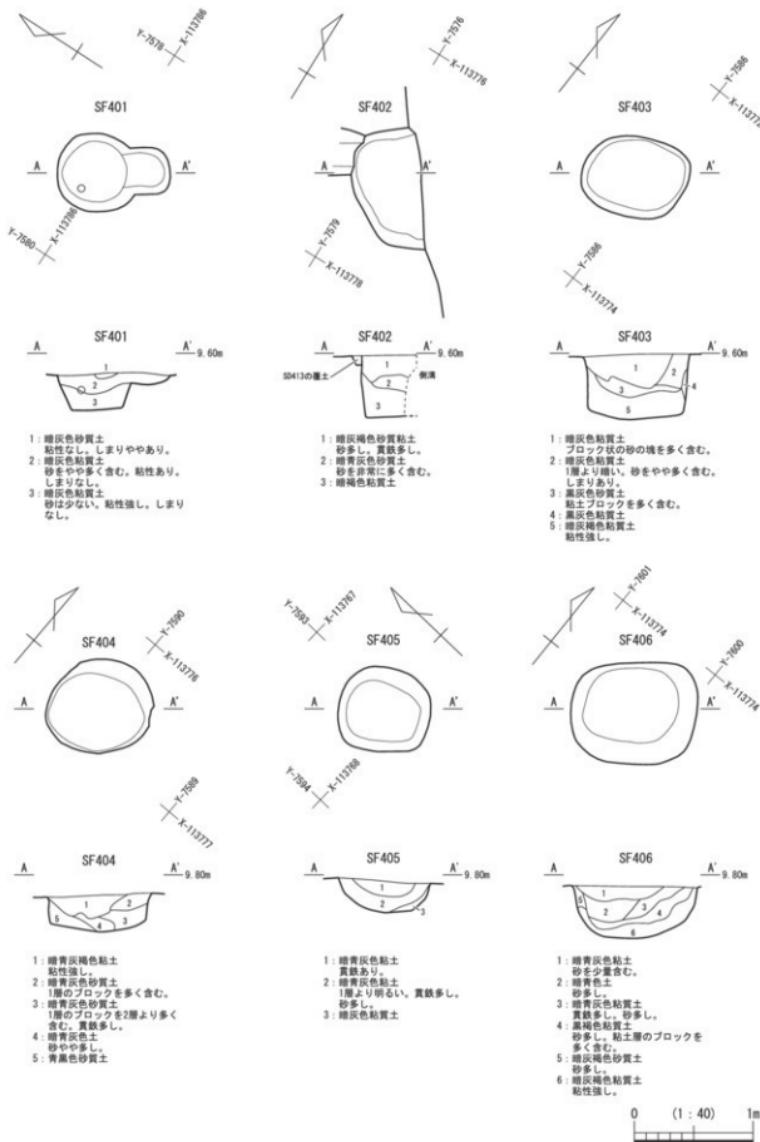
F-5グリッドより検出された。溝との切り合いはない。上端の平面形は歪んだ隅丸方形である。断面形状はボウル形であり、S F402～S F404のような壁が垂直に近く立ち上がるるものとは異なる。遺物はない。

カ S F406 (図版6-5)

E-5・6グリッドより検出された。S D433を切っている。上端の平面形はやや歪んだ隅丸長方形である。断面形状はボウル形であり、S F405に類似する。

第4表 土坑計測表

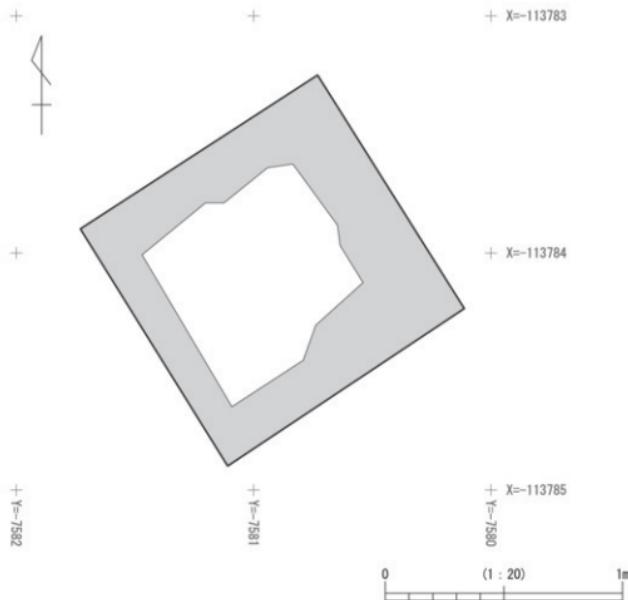
造構番号	区	面	グリッド	長径 m	短径 m	深さ m	平面形	備考
S F401	1	2	D-7	0.59	0.41	0.20	円形及び梢円形の重複	土器1点出土
S F402	1	2	E-7	0.63	0.37	0.33	不正円形ないし梢円形	
S F403	1	2	E-6	0.53	0.43	0.35	歪んだ隅丸方形	
S F404	1	2	E-5,6	0.57	0.49	0.20	歪んだ円形	
S F405	1	2	F-5	0.49	0.45	0.18	歪んだ隅丸方形	
S F406	1	2	E-4	0.66	0.54	0.28	歪んだ隅丸長方形	



第17図 土坑実測図

4 第3面の調査（第18図）（図版4、7-5・6）

前述したとおり、遺構は検出できなかった。板状（第24図33）及び棒状木製品（34）が各1点ずつ出土した。このうち板状のものは、8-①層の最下部から2つに割れて折り重なるように水平方向で出土したものである。最下部は8-②層にかかる可能性がある。遺物については、次節で述べる。この面の位置付けについては第5章を参照のこと。



第18図 1区第3面全体図

第2節 遺物

今回の調査では、ある程度の大きさ（腕時計の本体の大きさ（約4cm四方）を一つの目安とした）を有する遺物は、出土位置を点取りしながら取り上げ、それ以外の小さな遺物は、原則として、グリッド一括で取り上げた（金属製品、自然遺物等は微小な遺物でも点を取った）。両者の総数は268点で、内訳は、土器・陶磁器類が189点、漆製品・木製品・木片が61点、金属製品が5点、自然遺物が13点である。

調査面積や面数に比べて極めて少ないが、今回の調査区の全面が水田であったと思われることや、攢乱により失われた部分が大きかったことによるものと思われる。なお、近現代の遺物も、戦争関係のものは遺物として扱った。

点取りした遺物の分布状態であるが、1面は1号畦畔状遺構と、溝状遺構S D441・442周辺以外にはほとんど出土していない（第7図）。2面は1区の方が多く、特にE-6、D-6、D-7グリッド周辺

にまとまった分布が見て取れる（第9図）

1 土器・陶磁器（第19図）（図版8、9-1）

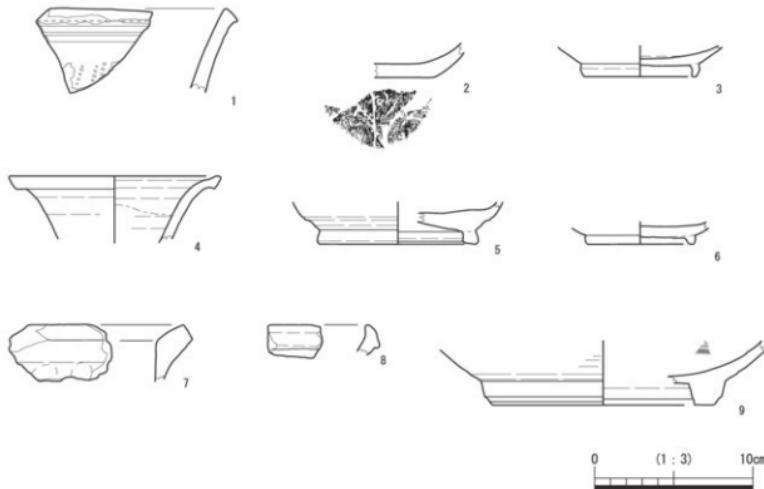
土器・陶磁器類は総数で189点出土した。大半は小片で、実測可能なものは極めて少ない。実測可能なものについては全て実測し、小片でも口縁部などで実測が必要なものについては、出来るだけ図化した。また、実測図を作成しなかったものについても、必要なものについては写真図版で掲示した。

第19図の遺物は、遺構に伴ったものは無く、全て標準土層の2層から出土したものである。

1は須恵器甕の口縁である。外面には自然釉が見られ、口縁直下にはナデによる凹線が2条見られる。頸部には櫛刃状工具の先端による刻み目が見られる。詳細時期は不明だが、古墳時代の後半～奈良時代のものと見られる。恐らく湖西の製品であろう。2は土師器の窯の可能性がある。全体に磨滅が激しく、小片のため図では底径の復元はできなかった。底部に木葉痕が見られる。

3～5は灰釉陶器である。3は皿の底部で、推定底径は約7.1cm。底部は回転ヘラ削りで、高台は「内面が内湾する三日月状」（菅原 2005）を呈す。灰釉はこの破片では見られない。助宗窯の初期の製品（10世紀前半？）であろうか。また、底部には墨痕らしきものが見え、転用窯であった可能性が強い（図版9-1）。4は長頭瓶の口縁部。この破片において、表面はほぼ全面、裏面は口縁から頸部の途中まで灰釉が見られる。折戸53号窯式期より新しい時期のものか。口径の復元径は13.4cm。5は恐らく長頭瓶の底部。厚ぼったいつくりであり、駿河・遠江の製品と比べて異なった印象を受ける。底部は回転糸切の後、貼付高台を施している。10世紀後半～11世紀前半の製品と推定される。

6は底径6.7cmで、むしろ山茶碗とすべき個体であろうか。11世紀代の可能性がある。底部は回転糸切の後、高台を貼付けている。雑なつくりである。7は、いわゆる清郷型甕（註2）の口縁部である。北村和宏氏の分類（北村 2001）のG類ないしH類と考えられる。氏によれば、折戸53号窯式期に併行す



第19図 遺物実測図（土器・陶器）

る10世紀前半の所産とされる。胎土中の白色粒子が目立つ。

8は中世の擂鉢の口縁部である。内・外面とも濃い紫色の鉄釉が施されている。口縁端部は三角形状に上方に立ち上がり、口縁の返りが弱く見られる。口縁の形状より、藤澤良祐氏の編年（藤澤 2005）の擂鉢I類、大窯2期の後半段階に比定できる。16世紀中頃の所産である（註3）。

9は、近世の唐津焼の鉢の底部で、18世紀前葉のものである。外面は高台の途中まで鉄釉がかけられている。内面は灰釉が掛けられており、残存部に僅かに刷毛目が見られる。

次に、実測はできなかったが、写真で破片を掲載したものについて記述する。

図版8-1・2-①～⑥は須恵器甕の破片である。全て2層中の出土で、③は2層の底面（第2面の遺構面）で出土した。①は頸部で、並行方向の沈線が2本見られる。②・③は何れも外面が黒色を呈す。③は奈良・平安時代のものであろう。④～⑥は何れもタタキ目が入ったもの。

図版8-3・4は灰釉陶器類をまとめた。①は壺の口縁部。第1面の遺構確認中に出土した。②は灰釉陶器の碗の底部。内面は見込みの底部分を無釉で残し、立ち上がった部分に灰釉を掛けている。黒窓90号窯式～折戸53号窯式の古段階に属すると思われる。③・④は、残存部分において施釉箇所はないが、灰釉陶器碗の底部である。⑤は灰釉皿の底部で、外面は、高台部分に僅かに灰釉の痕跡がある。内面はまだらに灰釉がみられ、刷毛による施釉の可能性がある。旗指窓か清ヶ谷窯の製品の可能性がある。⑥・⑦は釉はみられないが、灰釉陶器の碗（⑦は皿の可能性がある）の底部であろう。

⑧・⑪は何れも長頸瓶の底部で、⑧は10世紀後半～11世紀のものであろう。⑨は灰釉壺の袋物の可能性が高く、内外面共に極めてまばらに灰釉が掛けられている底部である。10世紀後半～11世紀前半のものであろうか。⑩は涅美焼の甕で、平安時代末～鎌倉時代古段階のものであろう。なお、図版9-1～①は灰釉陶器の碗の底部と思われる小片だが、底部に墨痕らしきものがある。

②～⑩は全て2層中より出土した。

図版8-5・6は中世～近世の陶磁器をまとめた。⑨が1区の擾乱中から、⑩が重機掘削中に1層から出土したのを除き、全て2層中の出土である。①は中国産の青磁で、鷄蓮弁文をもつ碗であろう。小片のため明確な時期比定は困難だが、13～14世紀のものと思われる。②～⑤は常滑焼の甕（又は壺）である。②は口縁部の形状から、中野晴久氏の編年（中野 2005）。13世紀後半の壺である。他は中世のものとしか判断できない。

⑥以下は戦国～近世の陶磁器。⑥は瀬戸・美濃の大窯期後半の可能性がある碗（又は皿）の底部である。内外面ともに鉄釉がかけられ、高台及びその中まで（疊付は無釉である）釉薬が掛けられている。見込みには重ね焼きの痕跡が残っている。⑦は大窯期（恐らくII期）の瀬戸・美濃製品の底部である。天目茶碗ないし小天目の可能性がある。16世紀中頃であろう。⑧は近世の甕で、外面に濃緑色の鉄釉が掛けられている。内面は無釉である。恐らく瀬戸・美濃の製品。⑨は近世の擂鉢で、瀬戸・美濃の製品である。⑩は17世紀の瀬戸・美濃の製品である。内面は全面、外面は底部近くまで灰釉が掛けられている。古墳時代土師器の「盤」に類似した器形の小型陶器で、茶入れに類似した特殊な器形と想定される。⑪は内面では全面、外面は底部近くまで貫入の入った灰釉を掛けた碗である。胎土は瀬戸・美濃と思われるが、つくりは京焼風である。京焼そのものの可能性もある。⑫は染付の磁器で、小片のため文様の詳細は分からぬ。

2 金属製品（第20図）（図版9）

銭貨1点、鉄釘1点、刃物類2点、近代の砲弾の薬莢1点が出土した。

1は銭貨で洪武通宝である。1368年初鑄の明銭で、ここで図示するのは無背である。日本で製作された摸銅錢（櫻木 2007）の可能性は否定できない。

2～3はいわゆる刃物類である。2は華奢な作りで、刃は鋒のため残存状況が悪い。上端部には目釘穴と思われる痕跡が見られる。短刀の小柄の可能性もある。3は、刀子と思われる。何らかの理由で曲がり、側面は湾曲している。

4の釘は、基部（釘の部位名称や分類等については（金箱 1984）に従った）が断面方形をなす和釘である。頭巻釘と思われる。

5は砲弾の薬莢である（註4）。形状は先端を絞ったボトルネック（Bottle Neck）型と思われるが、テーパード（Tapered）型の可能性もある。リム形状は、薬莢底部に張り出し（リム）のあるリムド型である。雷管（Primer）が残存し、そこに以下の刻印が見られる。右書きで「7八十昭」のほか、「東」、「E 1（又はE ℥）」、「倅」。リムの直径は、5.3cmないし5.4cmであり、薬莢本体の直径は、リム直上で50mm、先端（実測団上端）の残存部分で42mm程度である。断面は極めて薄く、先端部分で1mm以下、実測可能な部分での最も厚い部分で2mm程度である。断面図を見ると、リム上の底部はかなり厚いと想定され、その中央部分に中央部が窪む円錐形の張り出しがある。鋒が著しく、内部の実測は極めて困難だったので、正確さを欠くかもしれない。先端部の直径から見て、37mm砲弾の薬莢であろうか。

この薬莢であるが、雷管部分の刻印（註5）より、旧日本軍の戦時中の砲弾であることは明らかである。「7八十昭」の刻印は、昭和18年（1943年）7月を意味するとみて良いであろう。「倅」は、東京第一陸軍造兵廠の標識である。「東」はその検査印であり（註6）、最終製造責任を示すものである。「E 1（又はE ℥）」は何を意味するものか判明しなかった。製造物の品目を示すものであろうか。

東京第一陸軍造兵廠は、陸軍兵器廠の一支廠である（註7）。陸軍兵器廠は1940年3月30日の陸軍造兵廠令廃止と陸軍兵器廠令の改正により、それまでの陸軍造兵廠（1923年創設）と兵器支廠が統合、改組され設立された機関である。兵器本部、兵器補給廠、兵器廠から構成されていた。兵器廠の支廠（造兵廠）は東京第一のほか、東京第二、相模、名古屋、大阪、小倉、仁川（朝鮮）、南満（奉天）に置かれた。陸軍造兵廠の改組は、1939年末の修正軍備充実計画案更改を受けて成立した「昭和十五年軍備改良要領」に基づいたもので、陸軍航空軍備拡充と、兵器製造の一元化を主目的にしてなされたものである。

今回の調査で出土した薬莢を製造・検査した東京第一陸軍造兵廠は、第一（銃砲）、第二（精器）、第三（火具）の各製造所から構成され、現在の東京都北区十条台、王子本町他に所在していた（註8）。なお、第一製造所では小銃、機関銃の弾薬を、第二製造所では主に無線機、電話機等を、第三製造所では、信管、機関砲の弾薬等を製造していた。東京第一陸軍造兵廠跡地は、現在陸上自衛隊十条駐屯地、北区立中央公園などになり、東京第一造兵廠本部棟とレンガ倉庫等が現存している。

この薬莢が本遺跡に残された経緯については不明である。戦時中、本遺跡は、三菱重工業静岡発動機製作所の敷地内（隣接地？）であった。1945年4月12日に、工場は米軍による昼間空襲を受け大きな被害を出したが、その際の瓦礫が運び込まれ、その中に含まれていたものであろうか（註9）。

3 漆製品・木製品（第21～24図）（図版10～12）

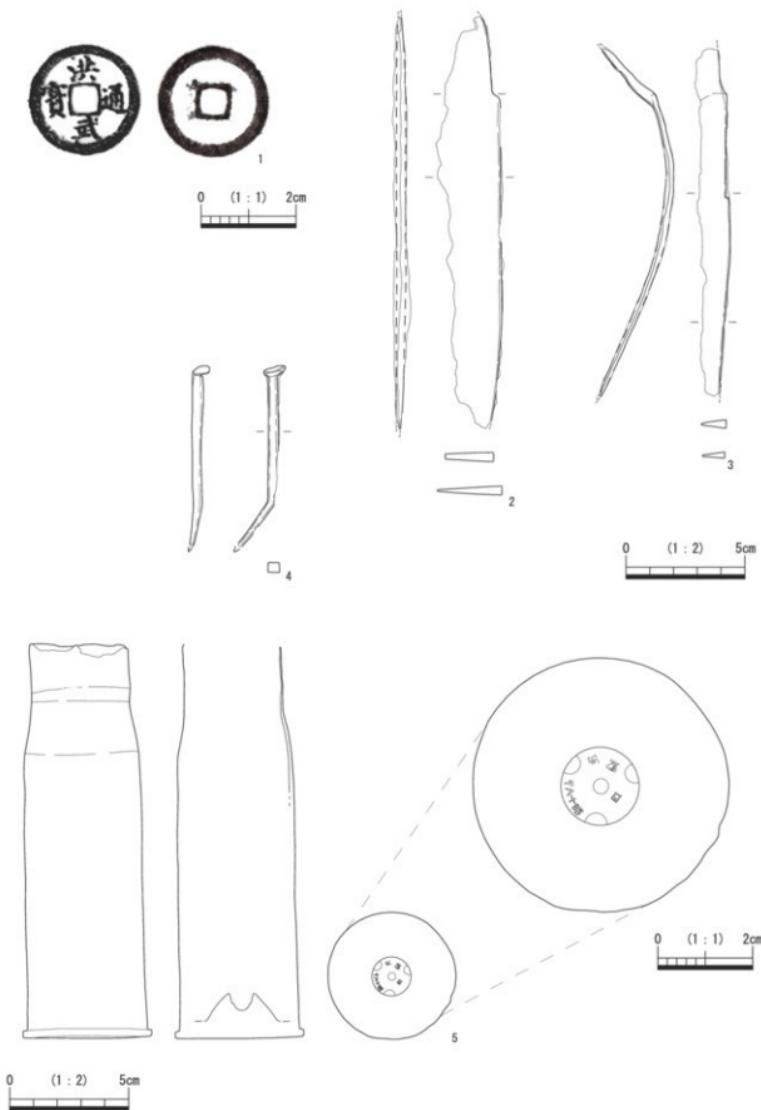
本遺跡で出土し、登録した木製品・木片は61点である。実測可能なものについては、可能な限り図を作成し、報告する方針を立てた。今回は34点の漆・木製品を報告する。なお、今回の調査では、上層調査面（第1面と第2面）のほかに、下層調査面の第3面より木製品が出土している。両者は明確な時期差を有するため、①第1・2面の木製品と、③第3面の木製品に分けて記述する。

（1）第1・2面の木製品

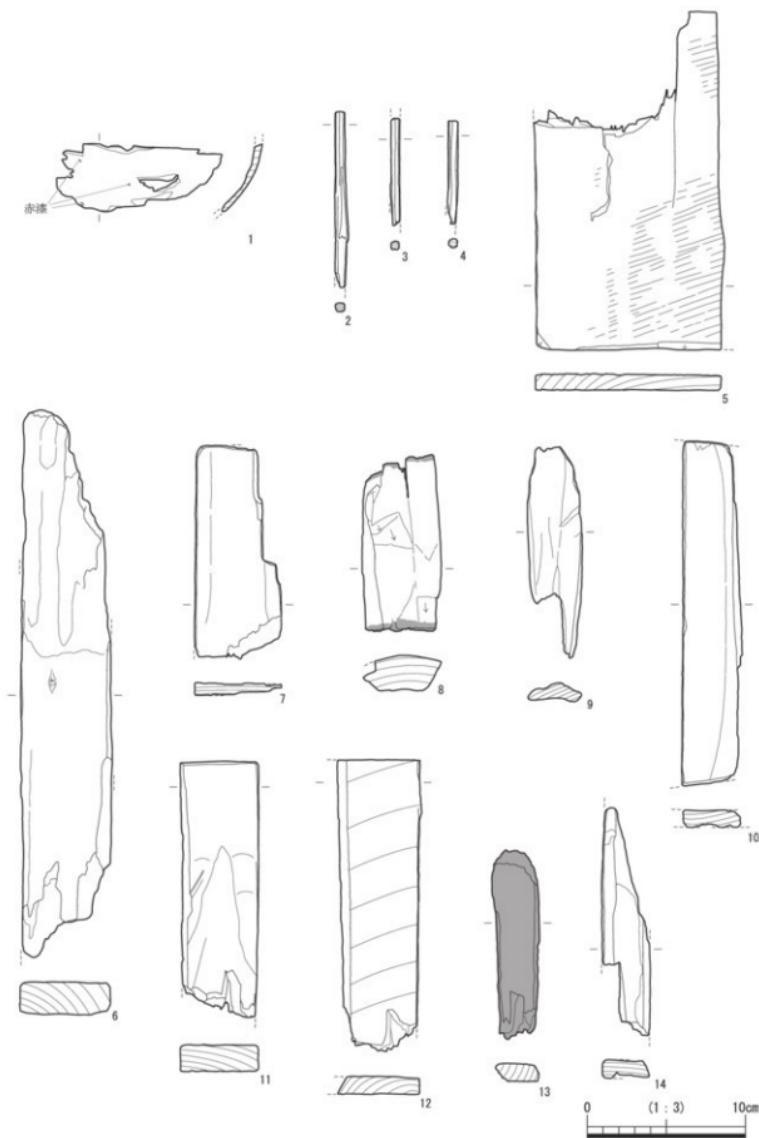
ア 容器（第21図1）（図版10）

漆器（1）

漆椀である。残存状況は悪いが、表・裏面ともに黒漆が塗られている。表面には赤漆がわずかに残存



第20図 遺物実測図（金属製品）



第21図 遺物実測図（木製品1）

しているが、紋様は不明である。

イ 食事具（第21図）（図版10）

箸（2～4）

2と4はいずれも欠損品だが、共に一端が残存しており、端部は平坦な削りを行っている。3は両端が欠損している。2と3は何れも断面方形に近く、4面を削り出していると思われる。4の断面はほぼ円形で、丸棒状に削り出している。4は第1面の遺構（SD441）の傍らで出土し、第1面に伴うものと考えられる。2層中から出土した2・3とは時間差があると思われる。

ウ 用途不明木製品（第21～22図）（図版10～11）

用途不明品については、形態から板状木製品と棒状木製品、その他の木製品に分類した。

(ア)板状木製品（第21図5～14）

5～9は第2面、10～14は第1面の遺物。5は左側面と下端は切断面が残存しているが、右側面と上端は欠損している。表面には斜め方向の鋸による切断痕が認められる。6は、側面は残存しているが、上下端は欠損している。全体的に腐食が激しい。7は左側面と上端は切断面が残存しているが、右側面と下端は欠損している。上端は裏面から切断していると思われる。8は上・下端に炭化が認められ、燃えさしとして利用した可能性がある。9は腐食が激しいが、両側面は割面であり、両端は欠損であろう。

10は上・下端が残存しているが、側面は割れている。11・12は共に下部が欠損している。12には鋸による切断痕が認められる。13はほぼ全面が炭化しており、燃えさしとして使用されたことは明らかである。14は全体に腐食が著しく、端部は欠損し、両側面も残存部があるか不確実である。

(イ)棒状木製品（残存部が棒状をなす欠損品を含む）（第22図15～19）

15～17は第2面の遺物。15は、部分的な欠損はあるが完形品で、両端が平坦に削り出されている。断面が六角形になるように側面が削り出されている。最大径は0.8cmある。全長は19.6cm。両端の削り等の点から、箸とは断定できず、箸状木製品としておきたい。他の製品の部材の可能性も考慮すべきかもしれない。16は下端部は欠損、17は下端が切断面として残存する。共に上端は炭化しており、燃えさしであることには明らかである。

18・19は1面の遺物。18はSD441の覆土から出土。現存部では断面が方形状をなすが、左側面は割面と思われ、板材の可能性がある。19は上端部が炭化しており、燃えさしの可能性がある。

(ウ)その他の木製品（20～21）

20・21は板状・棒状とも分類し難いもので、20は上端が、21は両端が炭化しており、燃えさしである。

エ 建築材（第22図22）（図版11）

柱根（22）

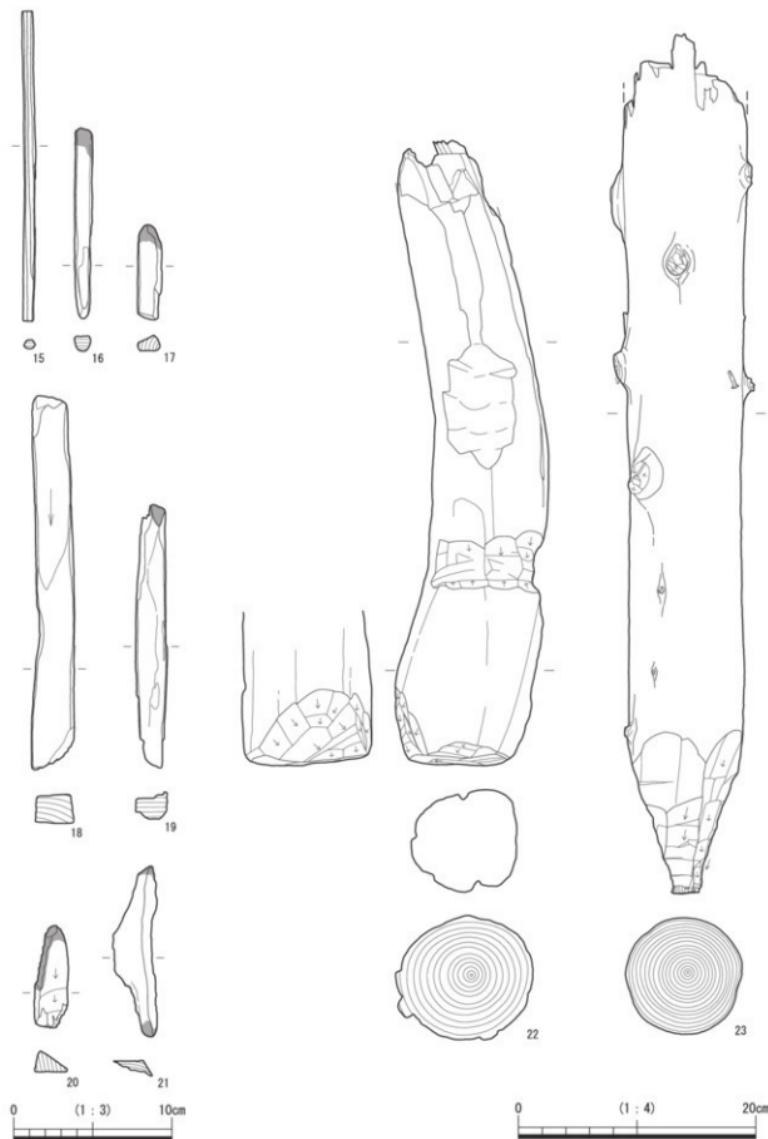
22は2層の下部に頭（実測図上）を出し、大半を3層以下にほぼ直立して埋もれる形で出土した。附近から他の柱根は出土せず、欠損品なので、杭等に転用されたものかもしれない。芯持材で、全体が湾曲した形で加工されている。下端が平坦に加工され、下端上の側面も一部加工している。恐らく材の角の部分を面取りしたものであろう。下端から約14.5cmのところで、約3.8cm程度の幅で削りによる抉りを入れているが、この抉りは全周していない。上端部は欠損している。

オ 土木材（第22図23、第23図）（図版11～12）

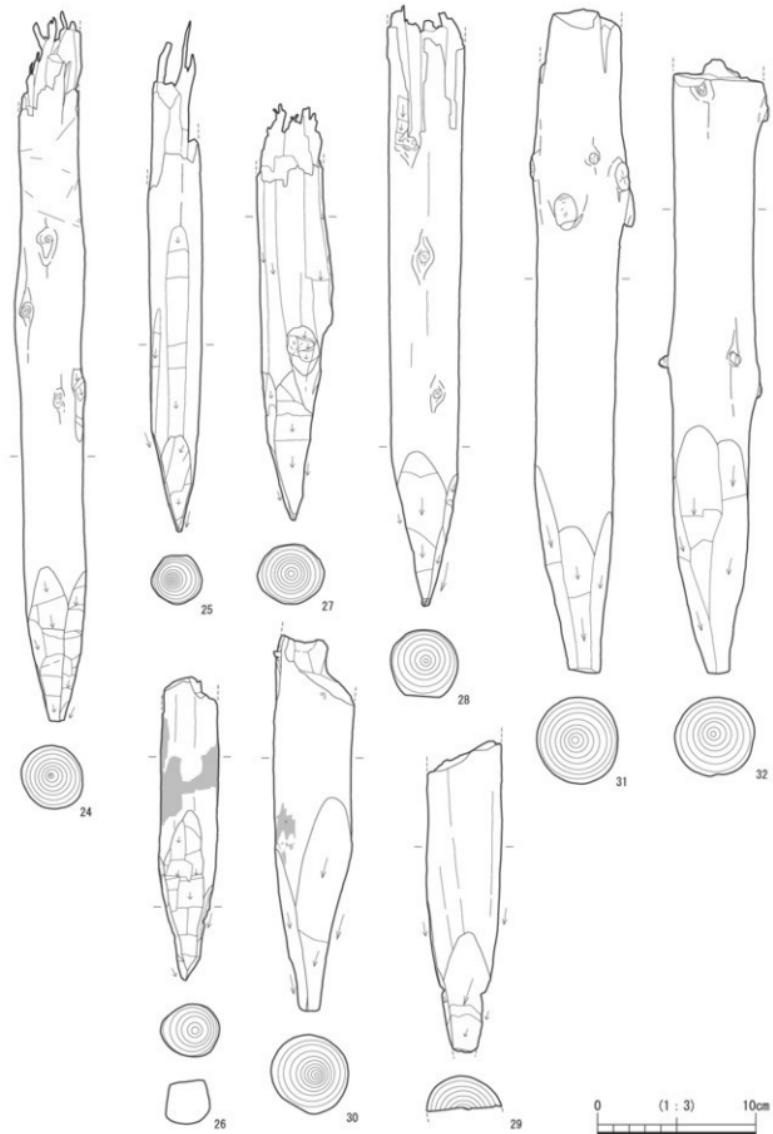
杭（23～32）

第1面調査時と第2面調査時それぞれに検出された杭であるが、打ち込んだレベルは正確には不明であり、厳密には出土層位については不明である。また、全点が上端を欠損しており、本来の長さも分らない。ここでは、それぞれ検出時の面を基準にして述べたい。

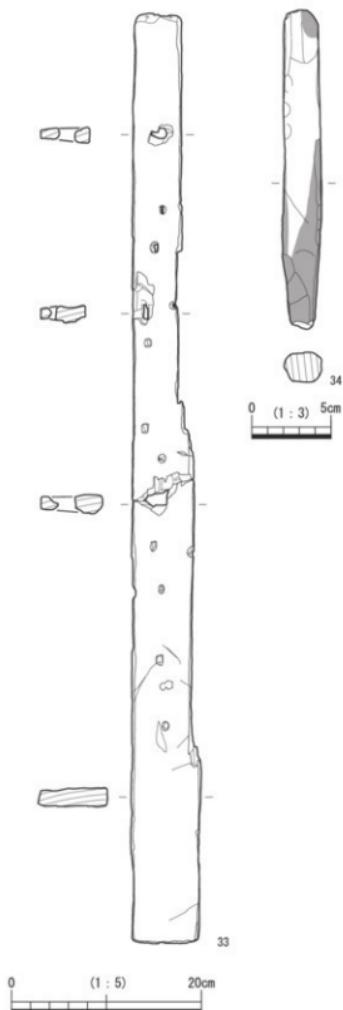
第2面調査時に検出された杭は、24～26である。24は全面自然面を残し、節が多く残されている。下



第22図 遺物実測図（木製品2）



第23図 遺物実測図（木製品3）



第24図 遺物実測図（木製品4）

端の加工もフレッシュであり、一見極めて新しいものに見える。25は側面が一部削られている。26は下端部の加工がやや細かい。また側面には一部樹皮が残存している。

1面調査時に検出された杭は23・27～32である。23は前述の24と同様一見して新しく見える。折れ曲がった釘が1本刺さっており、通常の丸釘である。27は側面には加工痕があるが自然面も残されている。23・30～32の側面は全て自然面である。

以上のとおり、第1面検出のものと第2面検出のものでは明確な違いを見出すことはできず（あえて言えば、自然面を残す杭が第1面には比較的多い）、実際には分離はあまり有効ではないであろう。

(2) 第3面の木製品

前述のとおり、第3面からは以下の木製品のみが遺物として出土した。他地点の成果から、弥生後期～古墳前期のものと考えられる。用途不明木製品のみである。

ア 用途不明木製品（第24図）（図版12）

(ア) 板状木製品（33）

2片に分かれ、重なるように出土したものが接合した。左側面はほぼ全面が残存している。右側面は割面ないし欠損している。上端部は加工痕が見えるが、下端部は腐食による欠損の可能性がある。現存長約102cmであり、現存幅は最大約7.3cmで、現存の形状は極めて長狭な板である。表面・裏面とも腐食が進んでいるが、特に裏面に著しい。断面で示した3孔は人為的な穿孔の可能性がある。それ以外の小孔は全て腐食によって生じたものと考えられる。

(イ) 棒状木製品（34）

全体に被熱の痕跡が認められる。両端は人為的に切断された可能性がある。上・下共に端部に向けての削りが行われており、特に下部は顕著である。下部は炭化が著しく、上端も部分的に炭化している。燃えさしの可能性もある。

第5表 遺物観察表（土器・陶器）

押国 番号	国版 番号	調査 区	面	層位	種別	器種	部位	器高 cm	器径 (残存 最大値) cm	口径 (推定) cm	底径 (推定) cm	内面色調	外面色調	胎土	取上 No.
19-1	8-1,2	1	2	2層	須恵器	甕	口縁部					施釉部分 10Y6/2 オリーブ灰	施釉部分 7.5Y5/2 灰オリーブ	2mm以下の砂粒を 少量含む	62
19-2	8-1,2	1	2	2層	土師器	壺?	底部	(2.2)		(約7)	10R5/4 赤褐	10R5/6 赤	4mm以下の砂粒を 少量含む	058 他	
19-3	9-3	2	2	2層	灰釉 陶器	甕	底部	(2.0)	(1.4)		(7.1)	2.5Y7/1 灰白	N7/1 灰白	0.5mm以下の黒色 粒子を微量含む	170
19-4	8-3,4	2	2	2層	灰釉 陶器	長頸瓶	口縁部	(4.1)		(13.4)		施釉部分 2.5Y6/2 灰黄 素地 2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	1~3mm以下の砂 粒を少量含む	156
19-5	8-3,4	1	2	2層	灰釉 陶器	長頸瓶	底部	(2.7)	(13.3)		(10.2)	N5/1 灰	施釉部分 5Y5/4~4/3 オリーブ~暗オリーブ 素地 N4/1 灰	1mm以下の砂粒を 多く含む	101 他
19-6	8-3,4	2	2	2層 中	山茶碗 ?		底部	(1.9)	(8.6)		6.7	N8/1 灰白	5Y8/1 灰白	1mm程の砂粒を多 く含む	136
19-7	8-1,2	1	2	2層 下部	土師質 土器	滑鄭型 甕	口縁部					7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/4 に赤い褐	3mm以下の石英・ 長石・角閃石・1 mm程の黒色粒子 を多く含む	123
19-8	8-5,6	1	2	2層	陶器	擂鉢	口縁部					施釉部分 7.5YR4/2 灰褐 素地 2.5YR7/3 淡黄	施釉部分 7.5YR4/2 灰褐 素地 2.5YR7/4 淡黄	1mm以下の白色粒 子を少量含む	106
19-9	8-5,6	2	2	2層	陶器 (研摩)	鉢	底部	(4.5)	(20.6)		(7.0)	2.5Y7/1 灰白	施釉部分 10R3/1 暗赤灰 素地 10R6/4 に赤い褐	1~4mmの白色粒 子を少量含む	174 他

第6表 遺物観察表（金属製品：銭貨）

押国 番号	国版 番号	区	面	層位	細別	径 cm	厚み cm	備考	取上 No.
20-1	9-2	1	2		銭貨	2.35	0.15	洪武通宝	030

第7表 遺物観察表（金属製品：刃物類）

押国 番号	国版 番号	区	面	層位	細別	全長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	茎部 断面形	刃部 最大幅 cm	刃部厚 cm	取上 No.
20-2	9-3	2	2	2層	刃物類	(17.3)	2.0	0.4	四角形?	2.4	0.45	177
20-3	9-3	1	2	2層	刀子	(14.6)	1.05	0.35	三角形	1.3	0.25	090

第8表 遺物観察表（金属製品：釘）

押国 番号	国版 番号	区	面	層位	細別	全長 cm	身部長 cm	頭部長 cm	身部 最大幅 cm	頭部 最大幅 cm	身部 断面形	取上 No.
20-4	9-3	1	2	2層	釘	(7.6)	(7.3)	0.3	0.5	0.9	四角形	059

第9表 遺物観察表（金属製品：砲弾）

押国 番号	国版 番号	区	面	層位	細別	全長 cm	胸部 最大幅 cm	底径 cm	備考	取上 No.
20-5	9-4~6			擾乱	砲弾	(16.65)	5.00	5.3×5.3	裏裏	196

第10表 遺物観察表（木製品）

押団番号	図版番号	調査区	遺構名	面	層位	細別	縦全長・口径 cm	横全長・底径 cm	最大厚・径・器高 cm	木取り	樹種	取上No.
21-1	10-1.2	1		2	2層	容器（椀）	—	—	(4.3)	横木取り	ケヤキ	057
21-2	10-3	2		2	2層	箸	(11.2)	0.8	0.6×0.6	板目	サワラ	172
21-3	10-4	1		2	2層	箸	(6.8)	0.6	0.6×0.6	板目	スギ	089
21-4	10-4	2		1		箸	(6.6)	0.7	0.6×0.6	板目	スギ	137
21-5	10-5	2		2		用途不明品	(21.4)	(12.1)	1.1	追査目	スギ	181
21-6	10-6	2		2		用途不明品	(34.6)	5.8	2.1	追査目	スギ	185
21-7	11-1	1		2		用途不明品	13.5	5.5	0.8	板目	スギ	110
21-8	11-2	1		2	2層	用途不明品	11.2	5.0	2.3	板目	ヒノキ	078
21-9	11-1	2		2	2層	用途不明品	(13.4)	(3.5)	1.2	追査目	ヒノキ	160
21-10	11-3	2	SD441	1		覆土 用途不明品	21.8	(3.8)	1.1	板目	ヒノキ	142
21-11	11-4	2		1		用途不明品	(16.2)	5.0	1.7	板目	マツ属単雄 管束亜属	182-①
21-12	11-4	2		1		用途不明品	(8.5)	(5.4)	1.1	追査目	ツガ属	182-②
21-13	11-4	2		1		用途不明品	(12.0)	(3.0)	1.1	査目	スギ	182-③
21-14	11-3	2	(1号群 群状遺 構の肩 出土)	1		用途不明品	(14.4)	3.0	1.2	板目	トウヒ属	148
22-15	10-3	2		2	2層	用途不明品	19.6	0.8	0.5×0.7	板目	スギ	178
22-16	11-2	2		2		用途不明品	(12.1)	(1.2)	1.0	板目	ヒノキ	159
22-17	11-2	1		2	2層	用途不明品	(6.0)	(1.6)	1.0	査目	クロマツ	104
22-18	11-3	2	SD441	1		覆土 用途不明品	(23.7)	(2.7)	1.8	板目	モミ属	151
22-19	11-1	2		1	2層 上面	用途不明品	(16.7)	(2.0)	1.7	板目	サワラ	150
22-20	11-2	2	SD441	1		覆土 用途不明品	(6.5)	(2.1)	1.3	査目	クロマツ	140
22-21	11-2	1		2	2層 下部	用途不明品	10.8	2.8	1.0	板目	クロマツ	105
22-22	11-5	2		2		柱根	(52.0)	13.0	10.5×11.6	芯持ち丸太材	クリ	190
22-23	11-6	1		1		杭	(72.5)	12.0	9.8×9.8	芯持ち丸太材	ヒノキ	195
23-24	12-1	1		2		杭	(44.9)	4.6	4.0×3.9	芯持ち丸太材	サワラ	194
23-25	12-2	2		2		杭	(32.3)	3.5	3.1×3.2	芯持ち丸太材	サワラ	179
23-26	12-2	2		2		杭	(19.2)	3.9	3.3×3.7	芯持ち丸太材	ウバメガシ	189
23-27	12-2	2		1	1層 中	杭	(26.3)	4.8	3.8×4.3	芯持ち丸太材	サワラ	180
23-28	12-1	2		1		杭	(38.0)	5.0	4.7×4.6	芯持ち丸太材	ヒノキ	183
23-29	12-2	2		1		杭	(19.7)	4.8	(2.2)×4.7	芯持ち丸太材	アカマツ	184
23-30	12-2	2		1		杭	(23.8)	5.1	5.0×4.9	芯持ち丸太材	アカマツ	188
23-31	12-1	2		1		杭	(42.0)	6.6	5.5×5.1	芯持ち丸太材	アカマツ	186
23-32	12-1	2		1		杭	(38.9)	6.5	5.0×5.1	芯持ち丸太材	アカマツ	187
24-33	12-3	1		3	黒色 泥炭層	用途不明品	102.2	7.3	2.0	板目	スギ	132+133
24-34	12-4	1		3	黒色 泥炭層	用途不明品	20.2	2.5	1.9	査目	スギ	131

註

- (1) 今回の調査区の1区は、平成6・7年度調査区の2区の南西であり、位置としては土坑が検出された平成6・7年度調査の1区より離れている。平成6・7年度の2区からは、土坑は発見されていないが、擾乱により破壊された可能性があり、本来あった可能性がある（第25回参照）。
- (2) 周知のとおり、この甕（ないし鍋）の呼称として「清郷型甕（鍋）」、「三河型甕（鍋）」等の呼称があるが本書では「清郷型甕」に統一した。
- (3) 大窯製品の同定と実年代比定については、藤澤良裕氏の論考（藤澤 2005）を参照した。最近、藤澤氏の実年代観を修正する見解（（中西 2013）等）も提出されているが、ここでは、藤澤氏の年代観で記述した。
- (4) 菓莢の記述において、以下を参考にした。

<http://www.warbirds.jp-Sasaki's Aerial Firearms Lab.:Ammo>

- (5) 刻印の記述において、以下を参考にした。

<http://ohmura-studynet/794.html>

- (6) 「東」の刻印は東京第一陸軍造兵廠のみならず、東京第二造兵廠も使用したと思われる。刻印においてその差異があるのか否かは、確認できなかった。ただし、第一造兵廠で製造して、検査は第二造兵廠で行ったとは考えにくいので、検査も第一造兵廠で行ったと想定する。
- (7) 以下、陸軍兵器廠、造兵廠関係の記述にあたっては、（防衛庁防衛研修所戦史室 1979）、（佐藤 1999）のほか、ウィキペディアの「陸軍造兵廠」の項を参考にした。
- (8) 以下、東京第一陸軍造兵廠とその跡地についての記述にあたっては、（東海林 2002）のほか、以下を参考にした。

<http://www.kitaku.info/area/jujo-area/jujodai-history.htm>

- (9) 三菱重工業静岡発動機製作所と、1945年の空襲についての記述にあたっては、（静岡新聞社 1975）（静岡平和資料館をつくる会 2005）を参考にした。なお、前書には、米軍撮影の、工場とその周辺の空中写真（爆撃前、爆撃時、爆撃後）が掲載されており、本遺跡も画面中に入っており、本遺跡の戦時の状況を確かめることができる。その写真によると、現小鹿キャンパスの大半は空き地状になっている。瓦礫置場、処分場として利用された可能性は高いと言えよう。ちなみに平成6・7年度の調査では、調査区内の擾乱（ごみ捨て穴）について、「空襲の跡の可能性あり」と指摘されている（静岡研 1996b : P.4）

なお、この日の空襲では、工場関係者は全員退避出来たため、人的被害はなかったとされるが、死者1名、負傷者4名の被害が、戦後、静岡市から米軍に報告されており、三菱工場内の被害であるかは不明である。12日の空襲では、静岡市見瀬（現駿河区）も空襲を受けており、三菱工場付近かこちらの被害の可能性もある。

第5章　まとめ

1　遺跡・遺構について

今回報告する、平成24年度の小鹿杉本堀合坪遺跡の調査は、平成6・7年度調査区の近接地（隣接地と言っても良い）で行われた。大筋において、過去の調査の成果を覆すものではなく、その延長上にあるものである。新たに加わった事実は決して多くはないが、多少の新知見も存在するので、以下調査面ごとに述べておきたい。

(1) 第1面

2層上面を遺構面とした。1層は旧表土層であり、重機で2層に近い深度まで除去しながら遺構検出を行った。遺構は第4章で述べたとおり、畦畔状遺構1条とそれと一体的な溝2条のみ（遺構番号は別となる2本の溝であるが、1条の溝であると想定されることは既に述べた）である。平成6・7年度の調査で多数検出された浅い溝と同様なものは検出できなかった。

遺構の時期決定を可能とする明確な遺物は出土していないが、遺構にともなう可能性のある杭の中には新しい（近代以降であろう）様相を示すものもあるので、近世～近代の遺構の可能性が強い。

第4章で述べたとおり、この畦畔状遺構と溝状遺構は、表層条里の坪界線と位置と主軸が概ね一致し、近世以降になんでも条里地割の痕跡を留めた遺構であると考えられる。

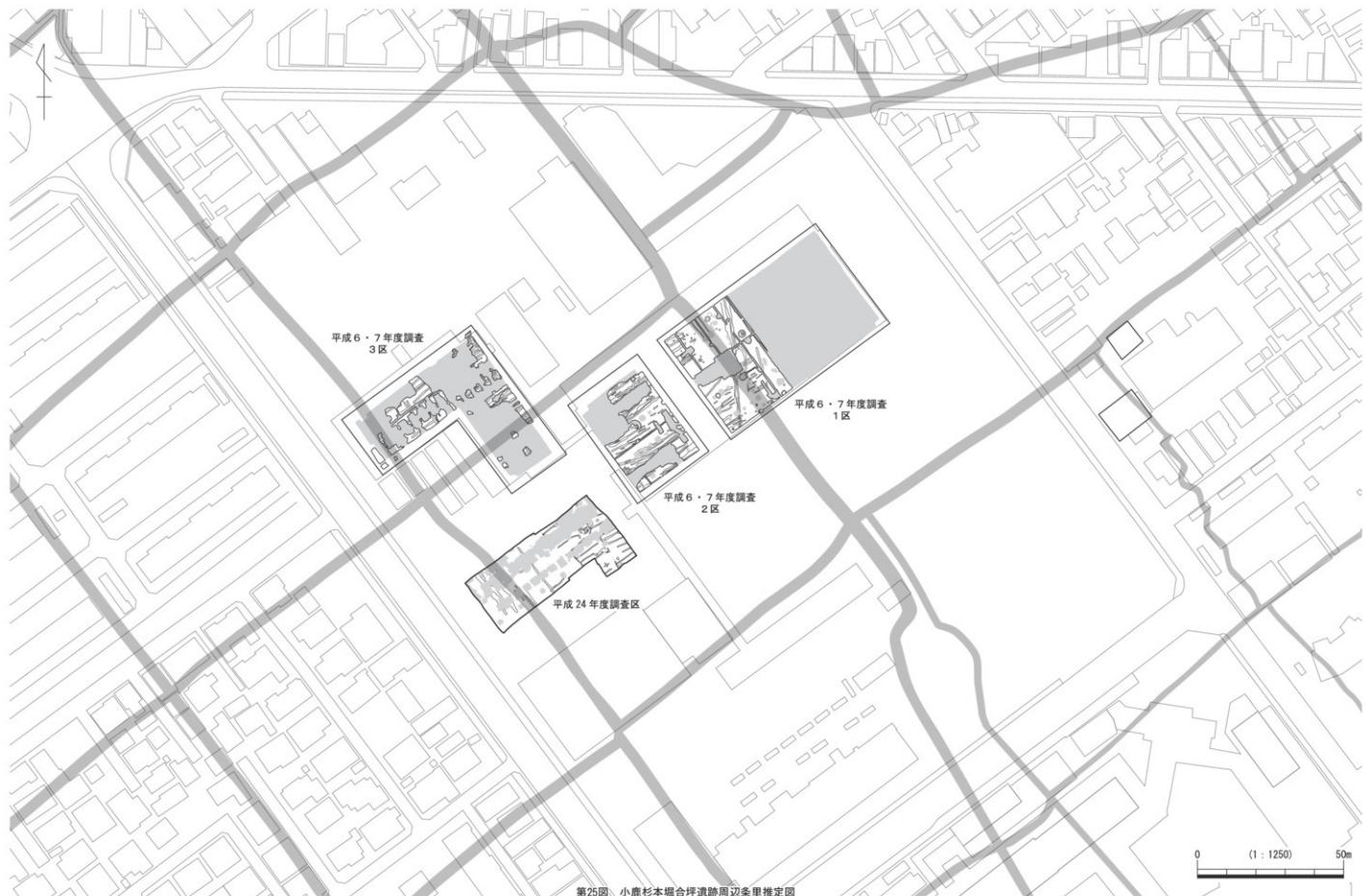
(2) 第2面

2層下面を遺構面とした。2層は包含層であるので人力掘削を行い、出土した遺物はこの面の遺物として扱った。畦畔状遺構、溝状遺構、土坑が検出された。ただし、各種の遺構が調査区に満遍なく存在しているわけでは無く、箇所ごとに疎密があることは前述した。繰り返しになるが、畦畔状遺構は1区で1条検出されたのみであり、土坑も1区でしか検出されなかった。攢乱等によって破壊されたものもあったことは想定されるが、畦畔状遺構と土坑の分布が偏っていることは認めて良いと思われる。

まず土坑についてだが、今回の調査で検出された土坑からは、時期決定に必要な遺物の出土はなかった。ただし、その形状や置土のあり方から、中世～近世に比定される、いわゆる「円形土坑」の範疇に入るものと思われる。この「円形土坑」の用途について定説はない状況であるが、水田関連の遺構と直接に結びつくものではないであろう。最も考え得るのは、墓壙か貯蔵穴であるが、何れであっても、人間の居住と関連する遺構であり、少なくとも土坑構築時には、構築箇所については、水田ではなかった可能性が考えられるのである。土坑の分布が今回の調査区の東側にのみ見られるのは示唆的である。すなわち、西側（2区）は、水田以外の土地利用がなされた可能性がほとんど見出されないので対し、東側（1区）は集落や墓域等、水田以外の土地利用がなされた時期があったと思われる。

ここで参考になるのは、平成6・7年度の調査区における土坑の分布状況である。この時の調査においても、土坑が検出されたのは東側の1区のみであり、中央の2区、西側の3区からは検出はされていない。1区からは、1基のみだが井戸跡（S E162）も検出されており、土坑と相まって、人間の居住の痕跡を窺わせる成果が得られている。もちろん、2区・3区は攢乱で破壊されており、実際にはこれらの遺構は存在したが、検出されなかつたとの解釈も可能である。特に3区の攢乱の状況はひどい。しかし今回の調査での成果を合わせて考えると、各年度とも最も西側の調査区（平成6・7年度の3区、今回の調査の2区）には本来土坑や井戸等の分布はなかったと考えたい。

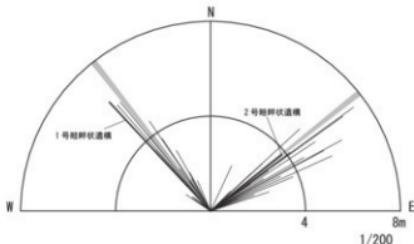
また前章でも述べたとおり、土坑は溝状遺構と重複している場合、全て溝状遺構を切って構築されている。この点は今回の調査で判明した新知見である。このことから、全ての土坑（平成6・7年度の調査分を含む）が溝状遺構より新しいと考えたい。土坑の時期は平安時代以降としてしか把握できない。



次に溝状遺構である。全体として、次のようなことが言えるだろう。①分布としては北東側に密であり、南西側は疎である。②主軸方向は強い規格性を窺わせる(第26図)。北東～南西方向に主軸をもつ溝の主軸は多くがN51°E～N55°Eの範囲に収まる。ただし、調査区東端部の溝はN59°E～N70°Eの範囲にまとまりを有す。また、北西～南東に主軸をもつ溝の主軸は、N34°W～N43°Wの範囲にまとまりを有する1群とそれ以外に分けられそうである。

静清平野広域表層条里は、N38°～39°W(直交する線はN51°～52°E)になると、本遺跡周辺でもそれが該当することが、既に指摘されている(静文研 1987)(矢田 1990)(第25図)。とするならば、多少のバラツキはあるとしても、N34°W～N43°Wと、N51°E～N55°Eに主軸方向を有する溝は、静清平野広域表層条里の方向と一致することとなる。調査区東端部で見られるN59°E～N70°Eに主軸を有する溝は、地形等の影響により方向に歪みが生じたものであろうか。

最後に、第2面で唯一検出された第2号畦畔状遺構であるが、表層条里の坪界線の位置とは大きな隔たりがある。ただし、主軸方向のN52°Eは条里の走行と完全に一致するので、条里制に関連した畦畔の可能性があると言えそうである。



第26図 溝状遺構及び畦畔状遺構方位図

(3) 第3面

今回の調査で判明した新知見として、遺物包含層である黒色泥炭層が検出できたことがあげられる。県立大学キャンパス外の平成13・15年度調査区で検出され、弥生後期後半～古墳前期前半の遺物を多量に出土した、黒色泥炭層～暗(黒)褐色土層に相当するとと思われる層である。ただし、過去の本遺跡での調査の層準と大幅に異なることは、第3章第2節で述べたとおりである。しかし、今回の調査でのデータから見て、やはり過去の調査の弥生～古墳時代層に比定されると考える。ただし、集落と直接関連するような遺物・遺構は検出されていない。

平成13・15年度調査区が微高地の集落部分と考えられるのに対し、小鹿キャンパス地域の大半は後背湿地であったと考えられる(第2章第1節を参照)。平成5年度の県教委文化課の調査では、当該層位よりシダラ状遺構とされる木組みが検出されており、また水田遺構に伴うと考え得る攪拌の痕跡や、足跡？等の落ち込みが検出されている(静岡県教委 1994)。平成6・7年度のキャンパス内の調査では旧河道が発見されている(静文研 1996b)。今回の調査地点は、このような後背湿地における流路や沼地などであった可能性が想定できる。

2 遺物について

今回の調査に伴う遺物は全体として非常に少ない。また、遺構に伴う遺物はほとんど存在せず、2層とした青灰色粘土層から出土した遺物が大半である。個々の遺物についての記述は第4章第2節で行っ

たので、以下概略的に古い時代のものから述べていきたい。

第3面調査によって出土した木製品は、その出土層準から考えて、弥生時代後期～古墳時代前期に属する可能性が高いと思われる。また、古墳時代後半～奈良時代と想定できる須恵器が若干出土している。

古代の遺物の中心をなすのは、平安時代に比定できる遺物である。第2面の遺構のうち、畦畔状遺構と溝状遺構は、平成6・7年度の調査成果を踏まえれば、この時期の遺構である可能性が高いといえよう。遺物は僅少だが、在地系と想定される灰釉陶器のほか、いわゆる「清郷型甕」が検出されている。「清郷型甕」の分布の中心は東海西部であるが、静岡県内の出土事例も増加しつつある。本遺跡では、平成6・7年の調査で既に検出・報告されており、今回の調査で事例を増加させることができた。

中世の遺物も、中世前期から戦国期にわたって出土しており、今回の調査地点の長期にわたる土地利用が窺える。近世以降も遺物は出土しており、近代の可能性の高い遺構も含めて人の活動の痕跡が散見された。

今回の調査で出土した遺物のうち、特に重要視されるのは、表土なし攢乱土中より出土した、旧日本陸軍の砲弾の薬莢であろう。事実記載は第4章で述べたので、ここでは総括的に述べたい。

この薬莢は、その刻印により、アジア・太平洋戦争後半の1943年（昭和18年）7月に、現在の東京都北区に所在した東京第一陸軍造兵廠で製造され、恐らく同所で検査された砲弾の薬莢である。第4章では、37mm砲弾の薬莢と推定した。また、この薬莢が本遺跡から出土した経緯については、1945年4月の、三菱重工業静岡発動機製作所への米軍の空襲により生じた瓦礫を、工場敷地内（隣接地？）の空地であった本遺跡内で処理し、その瓦礫の中に薬莢がふくまれていた経緯を推測した（註）。

薬莢についての事実認識や、出土の経緯については、不明な点や推測を交えた部分も多い。僅か1点の遺物であるが、戦争遺物としての薬莢から、本遺跡の位置する静岡市南部地域における、アジア・太平洋戦争の歴史を垣間見ることができた。不明な点については将来の研究を待つこととし、考古資料をも用いた、静岡県内のアジア・太平洋戦争の歴史についての研究が進展することを報告者は希望する。

(註) 第4章では、戦時の資料や、薬莢そのものが有する情報から以上のように推測した。しかし、疑問点もあるので、ここでそれについて記述したい。疑問点としては、三菱工場の瓦礫ならば、なぜエンジンを製造する軍需工場の瓦礫に、陸軍の砲弾の薬莢が含まれているのか、という点である。高射砲ないし高射機関砲の砲弾だとすれば、工場を防衛するための砲であると考え得るが、当時の三菱工場を防衛するために、高射砲ないし高射機関砲が配備されたという記録は、管見の限りない（ただし、近隣の住友軽金属プロペラ製造所静岡製作所を防衛するため、1945年4月の時点で、高射砲中隊2ヶ中隊が配備されていた（村瀬 1990））。また、その口径から高射砲弾であったとは考えにくいであろう。この砲弾が、速射砲弾（対戦車砲弾）や戦車砲弾とするならば、更に問題は大きくなる。工場内ではなく、他地域から持ち込まれた瓦礫であるとするることは想定できるが、その記録も現状ではない。最終的には、新資料の発見か、当時のことを正確に知る方の証言を得る以外、解明の方法はないと考えられる。

引用・参考文献

- 市村慎太郎 2001 「大阪府下出土弾丸について」『大阪文化財研究』第20号
- 加藤芳朗 1983 「有東遺跡をめぐる地形・地質的背景」「有東遺跡Ⅰ」静岡県文化財調査報告書第28集 静岡県教育委員会
- 金箱文夫 1984 「近世の釘」「物質文化』43
- 菊池実 2011 「戦争遺跡の調査研究を考える」「季刊考古学』第116号
- 北村和宏 2001 「古代「三河型壠」考」「研究紀要」第2号 愛知県埋蔵文化財センター
- 櫻木晋一 2007 「出土銭貨から見た中世貨幣流通」「貨幣の地域史 中世から近世へ」岩波書店
- 佐藤昌一 1999 「陸軍工廠の研究」八朔社
- 静岡県 1990 「静岡県史 資料編2 考古二」
- 静岡県教育委員会 1981 「静岡県の中世城館跡」静岡県文化財調査報告書第23集
- 静岡県教育委員会 1994 「曲金東遺跡 一平成5年度仮称県立医療福祉短大建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報-」
- 静岡県教育委員会 2001 「静岡県の前方後円墳一個別報告編-」「同-総括編-」「同-資料編-」静岡県文化財調査報告書第55集
- 静岡県教育委員会 2003 「静岡県の古代寺院・官衙遺跡」静岡県文化財調査報告書第57集
- 静岡県教育委員会 2011 「静岡県文化財年報(平成21年度)」
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 a 「曲金北遺跡Ⅱ」静岡県埋蔵文化財センター調査報告第16集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 b 「有東遺跡 - 第22次発掘調査報告書-」静岡県埋蔵文化財センター調査報告第18集
- 静岡古城研究会 2012 「静岡県の城跡 中世城郭図集成(中部・駿河国版)」
- 静岡市 2008 「ふちゅーる №16 平成18年度静岡市文化財年報」
- 静岡市 2013 「ふちゅーるミニ」第13号
- 静岡市教育委員会 1990 「静岡市の埋蔵文化財発掘調査の概要 平成元年度」
- 静岡市教育委員会 1993 「ふちゅーる №1 平成3年度静岡市文化財年報」
- 静岡市教育委員会 1996 a 「ふちゅーる №4 平成6年度静岡市文化財年報」
- 静岡市教育委員会 1996 b 「鷹ノ道遺跡」静岡市埋蔵文化財調査報告35
- 静岡市教育委員会 2000 「史跡片山庵寺保存管理計画」
- 静岡市教育委員会 2002 「長沼遺跡 第2次発掘調査報告書」静岡市埋蔵文化財調査報告58
- 静岡市教育委員会 2004 「汐入遺跡 第6次発掘調査報告書」
- 静岡市教育委員会 2005 「特別史跡登呂遺跡 再発掘調査報告書 (考古学調査編)」
- 静岡市教育委員会 2006 a 「特別史跡登呂遺跡 再発掘調査報告書 (自然科学分析・総括編)」
- 静岡市教育委員会 2006 b 「静岡市遺跡地名表」・「静岡市遺跡地図」
- 静岡市教育委員会 2008 「ふちゅーる №17 平成19年度静岡市文化財年報」
- 静岡市教育委員会 2009 「ふちゅーる №18 平成20年度静岡市文化財年報」
- 静岡市教育委員会 2010 a 「ふちゅーる №19 平成21年度静岡市文化財年報」
- 静岡市教育委員会 2010 b 「曲金北遺跡 - 第14次発掘調査報告書-」
- 静岡市教育委員会 2010 c 「宮川遺跡 第5次発掘調査報告書」
- 静岡市教育委員会 2011 a 「有東遺跡 第5次発掘調査報告書」
- 静岡市教育委員会 2011 b 「ふちゅーる №20 平成22年度静岡市文化財年報」
- 静岡市教育委員会 2011 c 「小鹿山神古墳 発掘調査報告書」
- 静岡市教育委員会 2011 d 「宮川5号墳 発掘調査報告書」
- 静岡市教育委員会 2012 a 「静岡市内遺跡群発掘調査報告書 (平成23年度)」

- 静岡市教育委員会 2012 b 「長沼遺跡 第5次発掘調査報告書」
- 静岡市教育委員会他 1982 「駿河・豊田遺跡－静岡市外局建設用地内遺跡発掘調査の報告－」
- 静岡市立登呂博物館 2004 「第32回特別展「古代建物のまつり」」^{さがはし}階にみられる人々の祈り」
- 静岡新聞社 1975 「大空襲 郷土燃ゆ 静岡県戦災の記録」
- 静岡大学人文学部考古学研究室 2010 「小鹿山神古墳－静岡市小鹿山神古墳測量調査・出土遺物調査報告書－」静岡大学人文学部地域連携叢書3
- 静岡平和資料館をつくる会 2005 「静岡・清水空襲の記録 2350余人へのレクイエム」
- 榎原和大 2008 「静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開」『静岡県考古学研究』№40
- 東海林次男 2002 「十条・板橋辺の火薬・兵器巨大工場群」「しらべる戦争遺跡の事典」柏書房
- 菅原雄一 2005 「助宗古窯跡群における灰釉陶器・山茶碗生産の様相」『藤枝市文化財年報－平成15年度－』
- 静文研 1987 「大谷川II（道構編）本文編」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第11集
- 静文研 1995 「静岡県埋蔵文化財調査研究所 年報 XI」
- 静文研 1996 a 「曲金北遺跡 道構編」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第68集
- 静文研 1996 b 「小鹿杉本堀合坪遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第70集
- 静文研 1997 「曲金北遺跡 遺物・考察編」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第92集
- 静文研 2002 「小鹿杉本堀合坪遺跡II」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第135集
- 静文研 2004 「小鹿杉本堀合坪遺跡III」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第144集
- 静文研 2005 「本郷坪遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第164集
- 中西義昌 2013 「繩張り研究の独自性と今後の展望－1980年代以降の新しい城郭研究が目指すもの－」「第30回全国城郭研究者セミナー シンポジウム「繩張り・考古・文献－城郭研究の明日－」」中世城郭研究会
- 中野晴久 2005 「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会 発表要旨・論考編』菊川シンポジウム実行委員会
- 沼館愛三 1935 「有度山塊を中心とする古城館址之研究」『静岡縣郷土研究』第五輯（1982年復刻版を参照）
- 比田井克仁 1995 「二重口縁壺の東国波及」「古代」第100号
- 藤澤良祐 2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会 発表要旨・論考編』菊川シンポジウム実行委員会
- 防衛庁防衛研修所戦史室 1979 「戦史叢書 陸軍軍戦備」朝雲新聞社
- 松田順一郎 2006 「流路・氾濫原堆積物から推測される約3100～1200年前の登呂遺跡における環境変化」「特別史跡登呂遺跡 再発掘調査報告書（自然科学分析・総括編）」静岡市教育委員会
- 村瀬隆彦 1990 「本土決戦準備期県内配置的主要陸軍部隊の概要」『静岡県近代史研究』第16号
- 目黒区大橋遺跡調査会他 2008 「大橋遺跡」上巻・下巻
- 矢田勝 1990 「静岡平野北部における条里制地割の復元と立地環境の変遷」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』III
- 矢田勝 1994 「駿府城の5倍もある巨大工場の跡」「史跡が語る静岡の十五年戦争」青木書店
- 渡井英裕 2008 「潤井川流域における古墳時代前期の高坏－大廓式の高坏を考える－」『静岡県考古学研究』№40

付編 静岡市小鹿杉本堀合坪遺跡出土木製品の樹種

鈴木三男・小林和貴（東北大学植物園）

はじめに

静岡市駿河区小鹿の小鹿杉本堀合坪遺跡から出土した木製品40点の樹種を調べた。資料の時期は弥生時代から、平安時代、中・近世そして近代にまたがると見られる。出土状態から個々の木製品の時期を特定するのは困難な遺跡である。

1 同定された樹種

1. モミ属 *Abies* マツ科 写真図版I-1a-c (15210)

年輪の明瞭な針葉樹材で、年輪幅は広く、早材から晩材への移行はゆるやかである。垂直、水平の樹脂道はない。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、垂直、水平壁は厚く多数の單壁孔がある。分野壁孔は小さいスギ～ヒノキ型で1分野あたり1～4個ある。これらの形質からマツ科のモミ属の材と同定した。モミ属には本州から九州の暖帯に一般的に生えるモミの他、静岡県内では冷温帯のウラジロモミ、亜高山帯のシラベなどがある。

モミは幹径1m、樹高30mになる常緑高木で、材は木理通直、割裂性良く、軽軟で加工が容易である。出土材は用途不明品の角棒状の木材1点である。時期は平安時代以降と見られる。

2. トウヒ属 *Picea* sp. マツ科 写真図版I-2a-c (15208)

垂直、水平の樹脂道のある年輪の明瞭な針葉樹材で、年輪幅は一般に広く、早材から晩材への移行はゆるやかである。放射組織は単列と水平樹脂道を持つ紡錘型で、柔細胞、樹脂道を構成するエビセリウム細胞、放射組織の上下の縁にある放射仮道管からなり、柔細胞の垂直、水平壁は厚く多数の單壁孔がある。分野壁孔は小さいスギ～ヒノキ型で1分野あたり1～4個ある。これらの形質からマツ科のトウヒ属の材と同定した。

静岡県内では富士山や南アルプスなどの冷温帯～亜高山帯にトウヒ、イラモミ、ハリモミがある。トウヒは幹径80cm、樹高30m近くなる常緑高木で、材は木理通直で緻密、肌目美しく弾力があり加工容易である。出土材は板目板状の木片1点である。

3. アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 写真図版I-3a-c (15225)

年輪幅の広い針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道を持つ。早材から晩材への移行はゆるやか、晩材部は幅広い。仮道管にらせん肥厚はない。放射組織は単列と紡錘形があり、後者に水平樹脂道がある。単列放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、分野壁孔は大型の窓状、放射仮道管の内壁は著しい歯状突起がある。これらの形質からマツ属複雜管束亜属のアカマツの材と同定した。

アカマツは北海道を除く全国の山野に普通の常緑針葉樹で、時に幹径1m、樹高30mになる。材は木理通直で重硬、肌目は粗、樹資分多く、加工性はやや難がある。水湿に特に強い。当遺跡出土材は近世以降とも思われる丸木杭4点と平安～近世の用途不明材1点である。

4. クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科 写真図版II-4a-c (15206)

アカマツによく似た針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道を持つ。早材から晩材への移行はゆるやか、晩

材部は厚い。放射組織は単列と紡錘形があり、後者に水平樹脂道がある。単列放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、分野壁孔は大型の窓状である。放射仮道管の内壁は厚く肥厚するが著しい歯牙状とはならないことでアカマツと区別される。これらの形質からマツ属複維管束亜属のクロマツの材と同定した。

クロマツは北海道を除く全国の主に海岸部に生育あるいは植栽される常緑針葉樹で、幹径1m、樹高30m以上になる。材はアカマツ同様だが樹脂分がそれより多い。当遺跡出土材は平安～近世の燃えさしの木片3点である。

5. マツ属單維管束亜属 *Pinus subgen. Haploxyylon* マツ科 写真図II-5a-c (15218)

年輪幅のやや狭い針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道がある。放射組織は単列と水平樹脂道を含む紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、分泌細胞からなる。分野壁孔は大型の梢円～窓型で1分野1個、仮道管の内壁は平滑である。これらの形質からマツ科マツ属のうち、ヒメコマツなどの單維管束亜属（五葉松類）の材と同定した。

静岡県の山地にはヒメコマツ（ゴヨウマツ）が分布している。材はアカマツ、クロマツより軽軟で樹脂もやや少なく、木理通直緻密で肌目は美しく加工性が良い。出土材は平安～近世の細い板である。

6. ツガ属 *Tsuga* マツ科 写真図版II-6a-c (15219)

垂直、水平の樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪界は明瞭である。樹脂細胞は見あたらない。仮道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列で柔細胞と放射仮道管からなる。柔細胞の垂直、水平壁は厚く多数の单壁孔がある。分野壁孔は小さく、スギ型で1分野あたり1～3個ある。これらの形質からマツ科のツガ属の材と同定した。ただ通常のツガ属材は早材から晩材への移行は急で、早材仮道管と晩材仮道管はサイズと壁孔がはっきり違う、その境目がはっきりしている。資料となつた出土材は移行は緩やかであり、境目が不鮮明であたかもモミ属材のごとくである。ただ、放射組織には放射仮道管があることからツガ属と同定した。

静岡県には山地帯の上部に分布するツガと、亜高山帯にあるコメツガがあるが材構造での区別は困難である。ツガは幹径1m、樹高20m以上になる常緑針葉樹で、木理通直、重硬で肌目粗く、加工性は中くらいである。出土材は平安～近世の細い板1点で鋸痕がある。

7. ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Siebold et Zucc. ヒノキ科 写真図版III-7a-c (15195)

垂直、水平の樹脂道を欠く針葉樹材で、晩材部は量少なく、早材から晩材への移行は幅の狭い年輪では急である。仮道管内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞は晩材部附近に多く、緩く集まって接線状に配列する。樹脂細胞の水平壁は通常厚く肥厚して数珠状になるが、平滑で比較的薄いこともある。細胞内に黒褐色の物質を含む。放射組織は単列で柔細胞からなる。分野壁孔は中型で輪郭が丸く、ヒノキ～トウヒ型、1分野に1～2個ある。これらの形質からヒノキ科のヒノキの材と同定した。

ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州の温帶域に分布する常緑針葉樹で、幹径1m近く、樹高は30m以上となる。材は木理通直、割裂性良く、弹性強く肌目美しい。出土材は平安～近世の箸1点、板目の割材2点、板目板1点、用途不明品1点、それに近世以降及び近代～現代と思われる丸木杭2点である。杭はいずれも年輪幅が広くて成長が良く、植林された木材と思われる。

8. サワラ *Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc. ヒノキ科 写真図版III-8a-c (15209)

ヒノキによく似た材で、晩材はわずかしか無く、早材から晩材へは急に変わる。樹脂細胞がやや接線

方向にまとまる傾向を見せて散在し、細胞内に茶褐色の物質を含み、細胞の水平壁は厚くなつて单壁孔を持つことが多い。放射組織は單列で柔細胞のみからなり分野壁孔はヒノキ型～スギ型で1～2個ある。これらの形質からヒノキ科ヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは東北～本州中部の温帯域に分布する常緑針葉樹で、ヒノキ同様の大きさとなる。材はヒノキ同様だが質がやや劣るが、特に水湿に強い。当遺跡出土材はヒノキと同じく、平安～近世の箸1点、棒状の割材1点、近世以降かと思われる丸木杭3点である。杭はヒノキ同様年輪幅が広くて成長が良く、植林された木材と思われる。

9. スギ *Cryptomeria japonica* (Linn.f.) D.Don スギ科 写真図版III-9a-c (15194)

年輪の明瞭な針葉樹材で、樹脂道はない。晩材は普通厚く、早材から晩材への移行は漸移的である。樹脂細胞がやや接線方向にまとまる傾向を見せて散在し、細胞内に黒褐色の物質を含み、細胞の水平壁は薄く平滑ことが多い。仮道管の有縁壁孔は1列でらせん肥厚はない。放射組織は單列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめのスギ型で1分野あたり2個で、開孔部の長軸は水平に近くなる。これらの形質からヒノキ科のスギの材と同定した。

スギは幹径2m、樹高30m以上の巨木となる常緑針葉樹で、静岡県内には天然杉が多く分布している。材は木理通直、割裂性良く、比較的軽軟で、加工性良い。当遺跡出土材は弥生～古墳時代と思われる板目細板1点と、焦げあとのある削りだし棒1点、平安～近世と思われる追い柾の板材2点と板目の薄板1点、その他用途不明品6点、箸2点などである。

10. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 写真図版IV-10a-c (15228)

丸い大道管が年輪始めに並び、そこから順次次を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が緩く集まって火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は单一、側壁の壁孔は丸い小孔紋でやや大振り小道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列同性、背は比較的低い。以上の形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道中部以南の全国に広く分布する落葉樹で、幹径1m、樹高30m近い大木となる。材はやや堅硬で割裂容易、肌目は粗いが加工性良く、特に水湿に強い。出土材は平安～近世の柱根1点である。

11. ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray ブナ科 写真図版IV-11a-c (15227)

中型の丸い道管が緩く放射方向に集まって配列する放射孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は单一、道管放射組織間壁孔は柵状になる。木部柔組織は接線状で1～数細胞層である。放射組織は単列同定と集合～複合状で、後者はかなり大きい。以上の形質からブナ科コナラ属コナラ亜属の常緑のウバメガシの材であることが分かる。

ウバメガシは静岡県の沿岸部の海岸林を構成する亜高木～低木で、材は極めて硬い。出土材は近世以降と思われる杭1点である。

12. ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科 写真図版IV-12a-c (14844)

年輪の始めに丸い大道管が1層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が密に集まって纖維塊と紋をなす環孔材で、道管の穿孔は单一、小道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は幅広く大型の紡錘形で、上下辺に大型の結晶細胞を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは北海道を除く全国の暖帯～温帯に広く分布する落葉広葉樹で、幹径2m、樹高30mを超える大木となる。材はやや粗だが、堅硬強韌で木理美しく、加工性も良い。出土材は中世～近世の漆器椀1

点である。

2 小鹿杉本堀合坪遺跡出土材の樹種組成の特徴

以上、40点の木材から12もの樹種が同定された。うち針葉樹が9種で広葉樹が3種しか無く、少ない資料数の中で実に多種類の針葉樹が使われていることに特徴がある。静岡県地方では最も普遍的なスギが13点と最も多いのは当然のこととして、やはり比較的良く出土するヒノキ、サワラ以外に、マツ科の多くの樹種がある。アカマツ、クロマツが多いことはこれらが近世、近代のものであることを窺わせるし、同様に近世以降の奥地林の木材利用が進む中で、温帶～亜高山帯に分布するゴヨウマツ類、ツガ属、トウヒ属などが流通していたことを窺わせる。一方、スギ、ヒノキ、サワラでは年輪幅が広い材も出土し、これらが天然林のものでは無く、植林されたものであることも窺えた。

表1. 小鹿杉本堀合坪遺跡 第IV次調査出土木製品の樹種

	プレバ ラート No.	木材番号	鉢図番号	樹種	細別	推定時期	調査 区	面	層位	備考
1	15193	W-037		スギ	用途不明品	平安～近世	1	2		
2	15194	W-047		スギ	用途不明品	平安～近世	1	2		
3	15195	W-056		ヒノキ	箸	平安～近世	1	2	2層	
4	14844	W-057	21-1	ケヤキ	容器	中世～近世	1	2	2層	櫻
5	15198	W-078	21-8	ヒノキ	用途不明品	平安～近世	1	2	2層	
6	15199	W-089	21-3	スギ	箸	平安～近世	1	2	2層	
7	15200	W-104	22-17	クロマツ	用途不明品	平安～近世	1	2	2層	燃えさし
8	15201	W-105	22-21	クロマツ	用途不明品	平安～近世	1	2	2層下部	燃えさし
9	15196	W-109②		アカマツ	用途不明品	平安～近世	1	2	2層下部	
10	15202	W-110	21-7	スギ	用途不明品	平安～近世	1	2		
11	15203	W-131	24-34	スギ	用途不明品	弥生～古墳	1	3	黒色泥炭層	
12	15204	W-132	24-33	スギ	用途不明品	弥生～古墳	1	3	黒色泥炭層	
13	15205	W-137	21-4	スギ	箸	平安～近世	2	1		
14	15206	W-140	22-20	クロマツ	用途不明品	平安～近世	2	1	SD441覆土	燃えさし
15	15207	W-142	21-10	ヒノキ	用途不明品	平安以降	2	1	SD441覆土	
16	15208	W-148	21-14	トウヒ属	用途不明品	平安以降	2	1		1号群群状遺構の肩出土
17	15209	W-150	22-19	サワラ	用途不明品	平安～近世	2	1	2層上面	
18	15210	W-151	22-18	モミ属	用途不明品	平安以降	2	1	SD441覆土	
19	15197	W-158		スギ	用途不明品	平安～近世	2	2	2層	
20	15211	W-159	22-16	ヒノキ	用途不明品	平安～近世	2	2		燃えさし
21	15212	W-160	21-9	ヒノキ	用途不明品	平安～近世	2	2	2層	
22	15213	W-172	21-2	サワラ	箸	平安～近世	2	2	2層	
23	15215	W-178	22-15	スギ	用途不明品	平安～近世	2	2	2層	
24	15214	W-179	23-25	サワラ	杭	近世以降	2	2		
25	15216	W-180	23-27	サワラ	杭	近世以降	2	1	1層中	
26	15217	W-181	21-5	スギ	用途不明品	平安～近世	2	2		
27	15218	W-182①	21-11	マツ属单轴 管束胞属	用途不明品	平安～近世	2	1		
28	15219	W-182②	21-12	ツガ属	用途不明品	平安～近世	2	1		断痕あり
29	15220	W-182③	21-13	スギ	用途不明品	平安～近世	2	1		燃えさし
30	15221	W-183	23-28	ヒノキ	杭	近世以降	2	1		
31	15222	W-184	23-29	アカマツ	杭	近世以降	2	1		
32	15223	W-185	21-6	スギ	用途不明品	平安～近世	2	2		
33	15224	W-186	23-31	アカマツ	杭	近世以降	2	1		
34	15225	W-187	23-32	アカマツ	杭	近世以降	2	1		
35	15226	W-188	23-30	アカマツ	杭	近世以降	2	1		
36	15227	W-189	23-26	ウバメガシ	杭	近世以降	2	2		
37	15228	W-190	22-22	クリ	柱根	平安～近世	2	2		
38	14976	W-191		スギ	用途不明品	平安～近世	2	2		曲物の部材の 可能性あり
39	15229	W-194	23-24	サワラ	杭	近世以降	1	2		
40	15230	W-195	22-23	ヒノキ	杭	近代～現代	1	1		

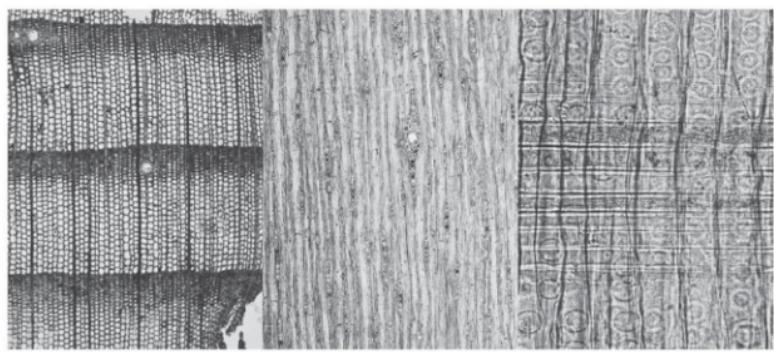
写真図版 I



1a, 毛ミ属 15210 木口×30,

1b, 同 板目×60,

1c, 同 桿目×240,



2a, ドウヒ属 15208 木口×30,

2b, 同 板目×60,

2c, 同 桿目×240,



3a, アカマツ 15225 木口×30,

3b, 同 板目×60,

3c, 同 桿目×240,

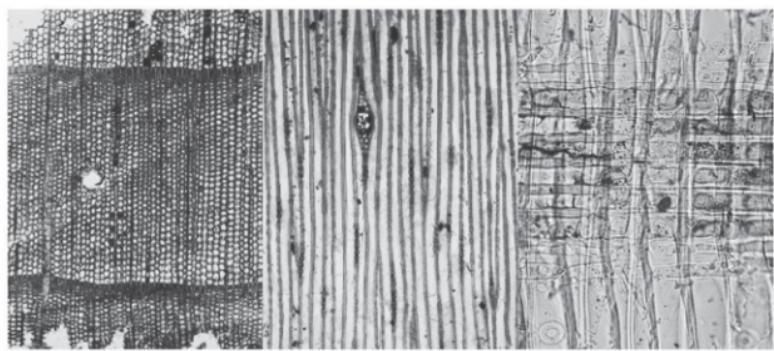
写真図版II



4a, クロマツ 15206 木口×30,

4b, 同 板目×60,

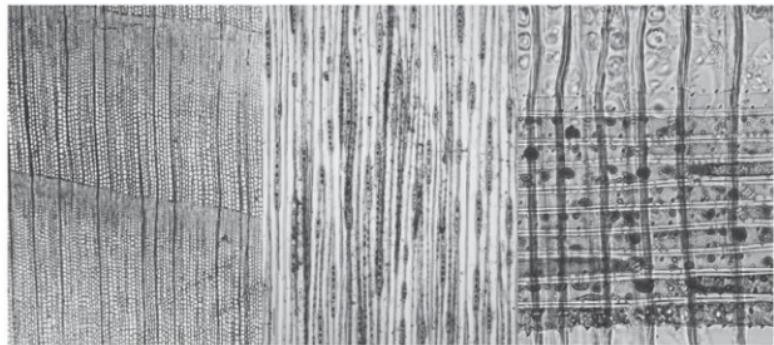
4c, 同 柱目×240,



5a, 単維管束亜属 15218 木口×30,

5b, 同 板目×60,

5c, 同 柱目×240,

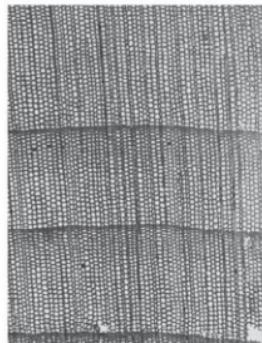


6a, ツガ属 15219 木口×30,

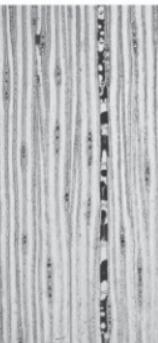
6b, 同 板目×60,

6c, 同 柱目×240,

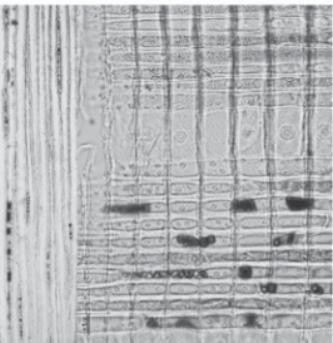
写真図版III



7a. ヒノキ 15195 木口×30,



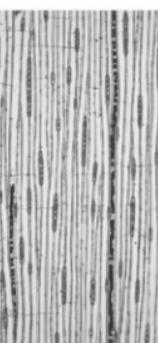
7b. 同 板目×60,



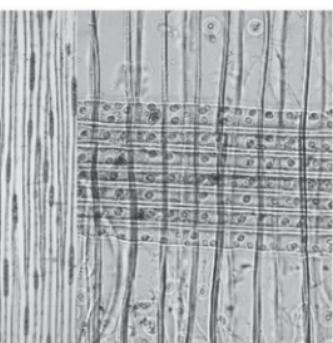
7c. 同 桩目×240,



8a. サワラ 15209 木口×30,



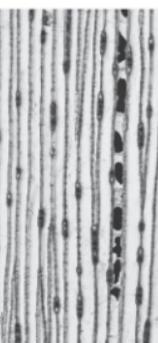
8b. 同 板目×60,



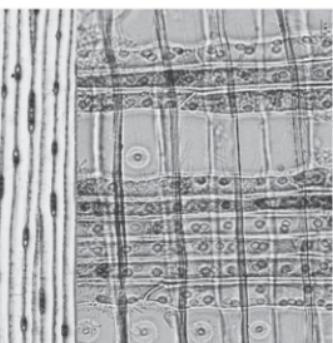
8c. 同 桩目×240,



9a. スギ 15194 木口×30,

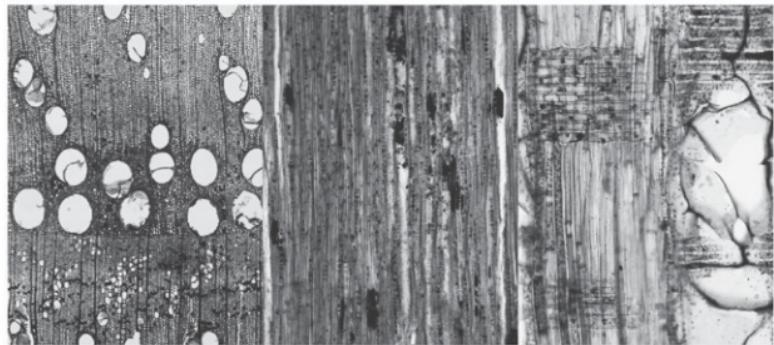


9b. 同 板目×60,



9c. 同 桩目×240,

写真図版IV



10a. クリ 15228 木口×30.

10b. 同 板目×60.

10c. 同 横目×120.



11a. ウバメガシ 15227 木口×30.

11b. 同 板目×60.

11c. 同 横目×120.



12a. ケヤキ 14844 木口×30.

12b. 同 板目×60.

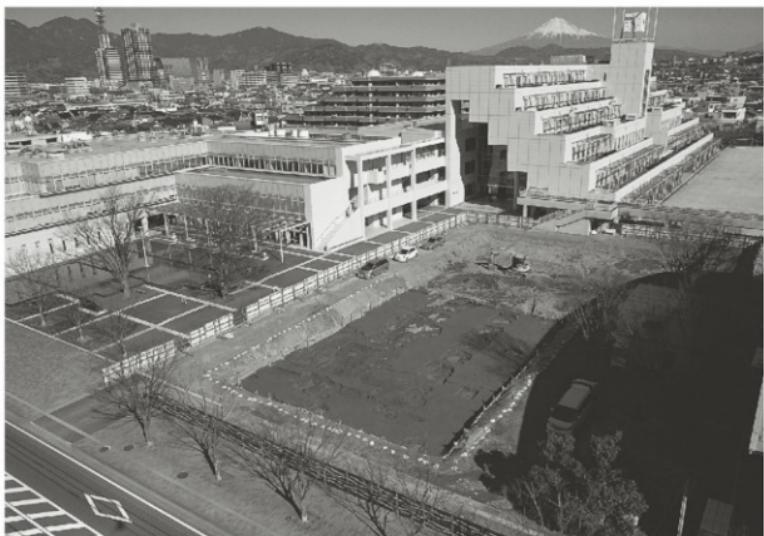
12c. 同 横目×120.

写 真 図 版

図版1



1 調査区全景及び1区第2面完掘状況（北東より）



2 調査区全景及び2区完掘状況（南より）

図版2



1 2区第1面完掘状況



2 1区第2面完掘状況

図版3

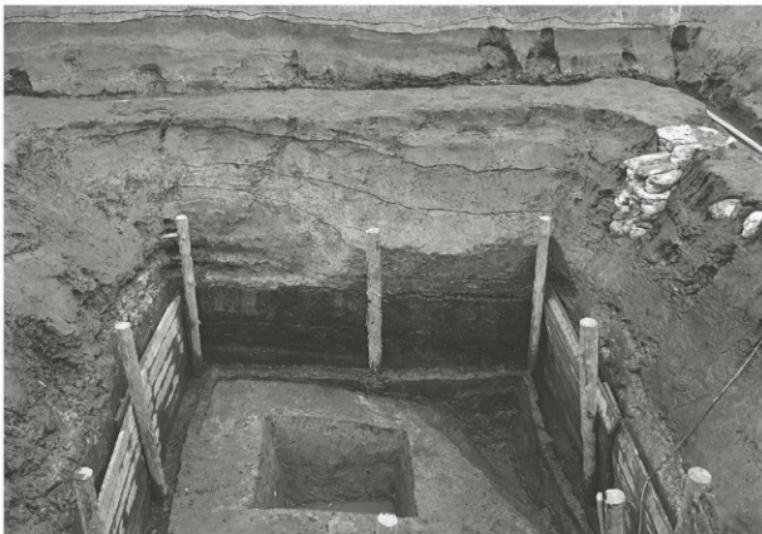


1 2区第2面完掘状況

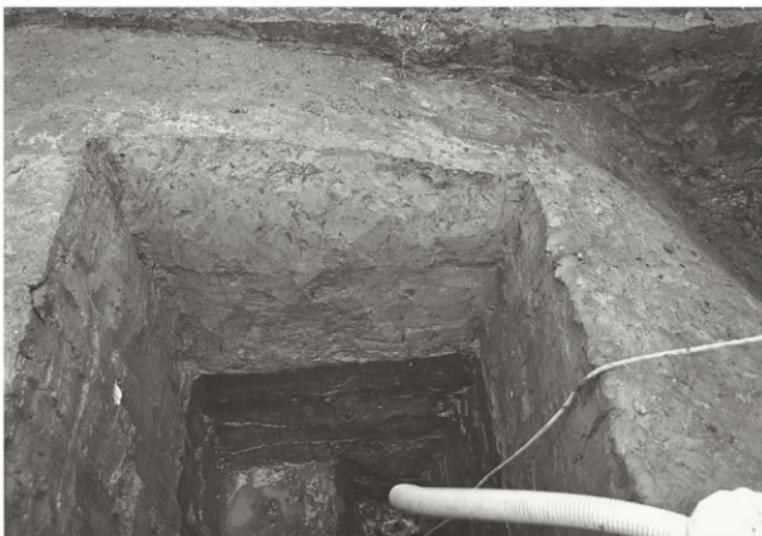


2 土層堆積状況（上層）

図版4



1 土層堆積状況（中層）



2 土層堆積状況（下層）

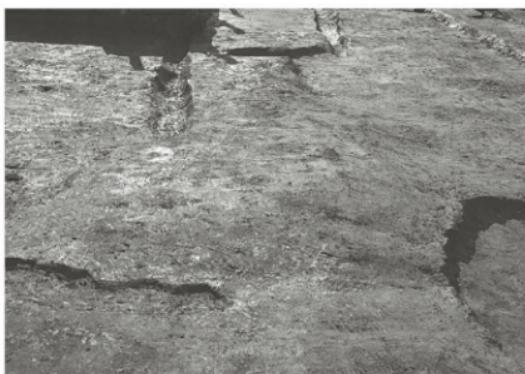
図版5



1 1号畦畔状遺構及び
SD441完掘状況（南東より）



2 1号畦畔状遺構周辺の杭出土
状況（南東より）



3 2号畦畔状遺構完掘状況
(北東より)

図版6



1 SF401完掘状況（北東より）



2 SF402半裁状況（南東より）



3 SF403半裁状況（南東より）



4 SF404半裁状況（南東より）



5 SF406半裁状況（南東より）

図版7



1 SD451完掘状況（南より）



2 SD454～456完掘状況（南東より）



3 SD457完掘状況（北東より）



4 1区第2面漆椀出土状況

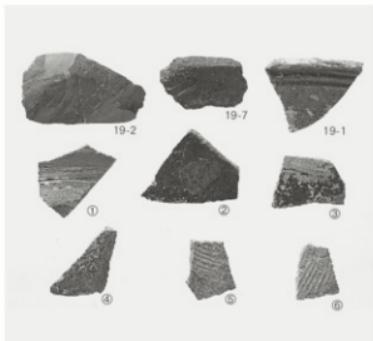


5 1区第3面木製品出土状況

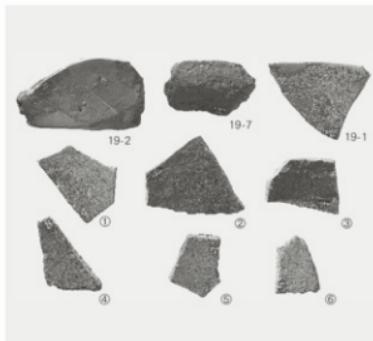


6 1区第3面木製品出土状況

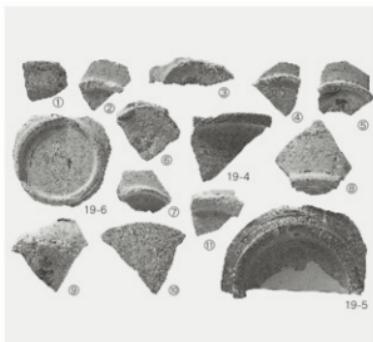
図版8



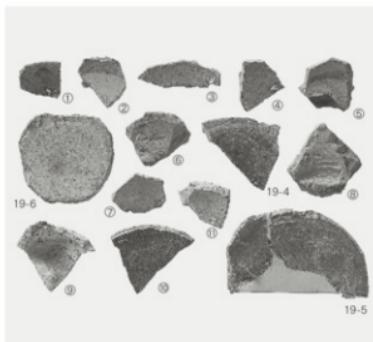
1 土師器・須恵器他（表面）



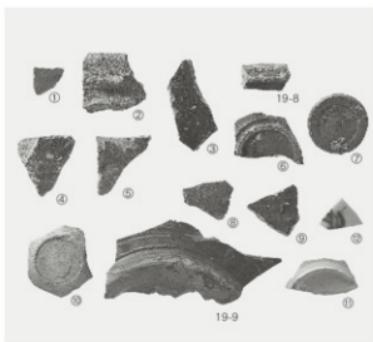
2 土師器・須恵器他（裏面）



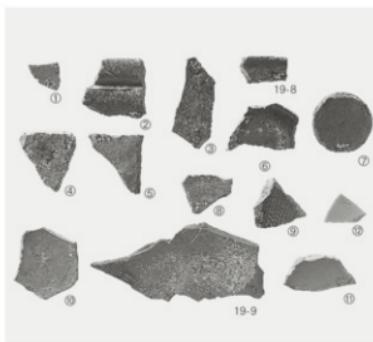
3 灰釉陶器他（表面）



4 灰釉陶器他（裏面）

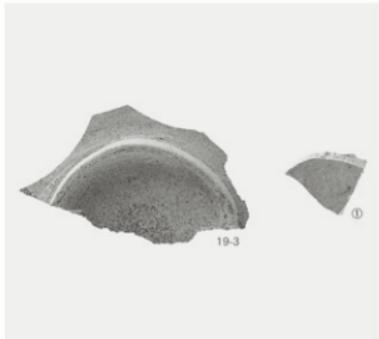


5 中・近世陶磁器（表面）



6 中・近世陶磁器（裏面）

図版9



1 転用硯？・墨書？



2 古銭（洪武通宝）



3 鉄製品（刃物類・釘）



4 砲弾の薬莢

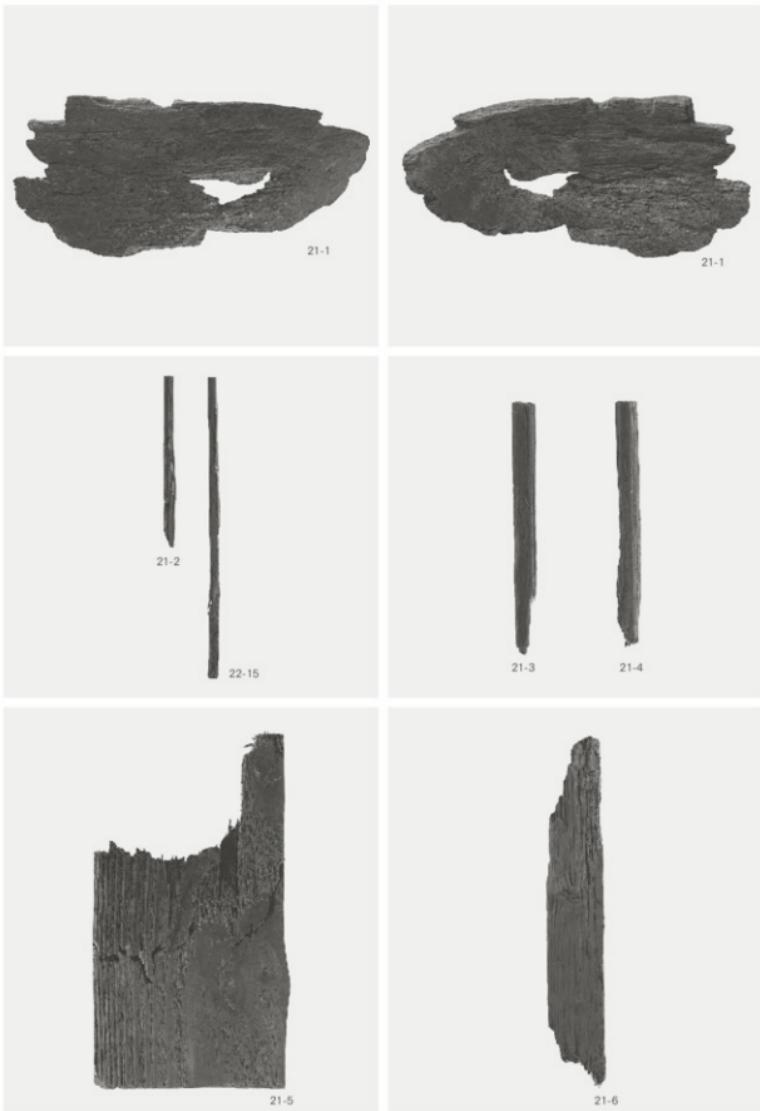


5 砲弾の薬莢（側面）



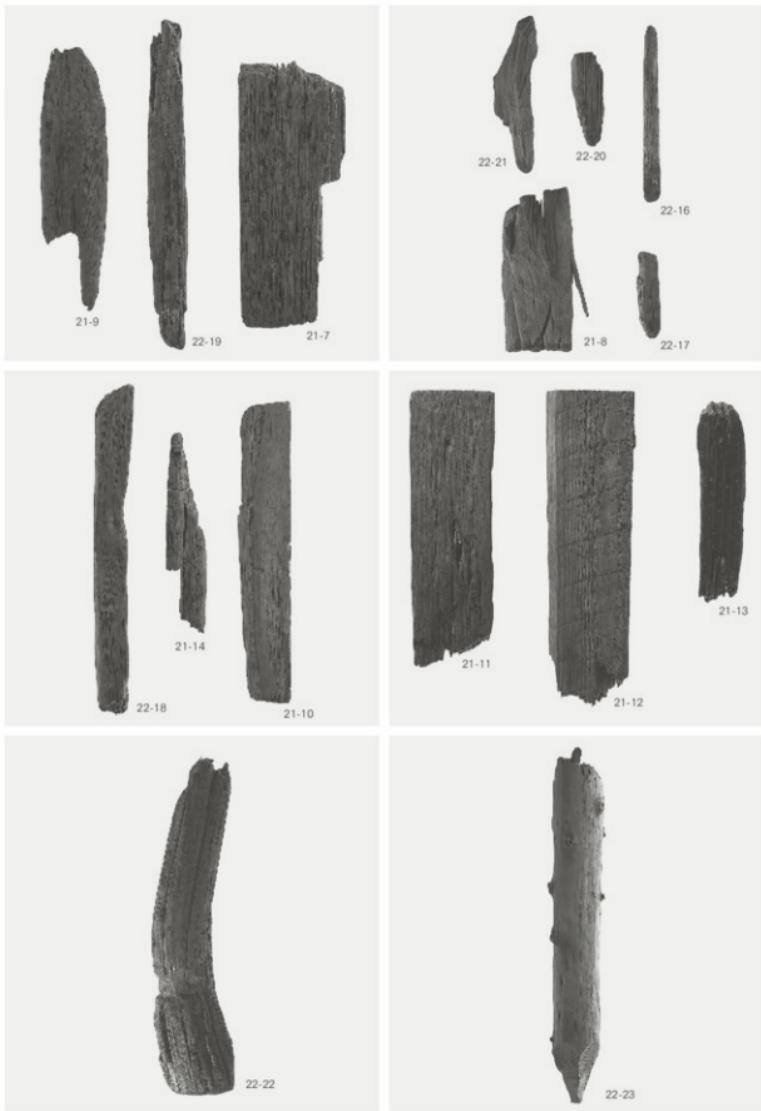
6 薬莢雷管の刻印

図版 10



木製品 1

図版 11



木製品 2

図版 12



木製品 3

報告書抄録

ふりがな	おしかすぎもとほりあいっぽいせき						
書名	小鹿杉本塙合坪遺跡IV						
調査名	平成24年度静岡県立大学新看護学部棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第41集						
編著者名	木崎道昭、鈴木三男、小林和貴						
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL. 054-262-4261㈹						
発行年月日	2014年2月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コー ド	北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
小鹿杉本 塙合坪遺跡	静岡県静岡市 駿河区小鹿2丁目 2-1	22102	34°58'27"	138°25'01"	2012.07.30～ 2013.02.02	1473.42m ²	記録保存調査 (大学校舎建設)
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
	散布地	弥生～古墳		木製品2			第3面の陪祀層中より出土。時期は、他地点の層位からの推定
	散布地	古墳？～古代		須恵器（鏡）、土師器？			時期やや不明確
	水田 基？	平安～近世	昭群状遺構1 土坑6 溝状遺構55	土師質土器（清都型莞等）、灰陶陶器、山茶碗7、中・近世国産陶器（常滑、瀬戸、美濃等）、中国產青磁1、木製品、漆製品1、金銀製品（刀子2、針1）、鍛鉄（浜武造）1、自然遺物			遺構面は第2面。昭群状遺構、溝状遺構の主軸走行は、静清平野の広域表層集落とはほぼ一致。土坑は溝状遺構を切って構築
	水田	近世以降	昭群状遺構1 溝状遺構2	陶器、木製品（杭等）、自然遺物			遺構面は第1面。昭群状遺構と溝状遺構は、一併的であり、静清平野の広域表層集落の坪界線とはほぼ一致
散布地？	近代		旧日本陸軍の砲弾の薬莢1			理乱ない島塚中より出土。東京第一陸軍造兵廠製作	
備考	第3面の黒色泥炭層は弥生時代後期～古墳時代前期の包含層と考えられるが、そこから、板状及び柱状の木製品が出土した。第2面では須恵器の破片が出土しているが、時期は古墳後期～古代で、やや不明確である。第2面で検出された遺構は、平安時代以前と想定される水田開拓の遺構が主であり、昭群状遺構及び多数の溝状遺構のほかに、土坑も検出された。土坑は溝状遺構を切って構築されており、先後関係が認められる。昭群状遺構及び溝状遺構の主軸方向は、静清平野の広域表層集落とはほぼ一致し、余里町に基づく水田論と思われる。第1面は近世以前と考えられる水田面であり、一体となった昭群状遺構と溝状遺構が喰合せられ、広域表層集落の坪界線とはほぼ一致する。第1面の遺構は枕列が併っていた可能性もある。調査区は全面にわたって、旧静岡医科大学時代の建物基礎と思われる搅乱により破壊されている部分が多く、遺跡の保存状態は悪かった。この擾乱なし盛土中より、旧日本陸軍の砲弾の薬莢が出土した。その形状により、東京第一陸軍造兵廠（現東京都北区に所在）で1943（昭和18）年に製造された37mm砲弾のものと考えられる。本遺跡隣接地（又は本遺跡を含む地区）に所在した、旧三重重工業静岡発動機製作所が、1945年に米軍の空襲を受けて大きな被害を受けた際、その瓦礫が今回の調査地点に運び込まれ、その中に含まれていた可能性を想定した。						

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第41集

小鹿杉本塙合坪遺跡IV

平成24年度静岡県立大学新看護学部棟建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26年2月28日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹